

CAMINOS-2 (*michi* : 道)
(*Ensayos sobre la cultura de la peregrinación*)

Aiko Arai*
Bernardo Villasanz**

ÍNDICE GENERAL

INTRODUCCIÓN

PRÓLOGO

1. 「スペインの巡礼の道を歩く」(二), (三)
HACIENDO EL CAMINO DE PEREGRINACIÓN DE ESPAÑA.
(Título en el original japonés: *supein no junrei no michi wo aruku.*)
Por Aiko Arai (新井 藍子).
2. REFLEXIONES EN EL CAMINO DE LA ORACIÓN.
(El Camino de *Oracio*: オラシヨ巡礼の道)

Por Bernardo Villasanz.

* **Aiko Arai.** Ex profesora de la Universidad de Fukuoka (Japón).

** **Bernardo Villasanz.** Catedrático Emérito (名誉教授) de la Facultad de Humanidades. Universidad de Fukuoka (Japón).

INTRODUCCIÓN

El **Camino de Santiago** es un itinerario declarado por El Consejo de Europa como “primer itinerario cultural europeo” señalando la importancia tanto desde el punto de vista cultural, religioso y político en la conformación de la idea de Europa. Tradicionalmente se ha recorrido por motivaciones religiosas aunque en la actualidad existen una variedad de motivos entre ellos el ocio y las actividades físico-deportivas unidos al turismo rural.

“**El Camino de Oracio**” (オラシヨ巡礼の道) es una ruta a pie de 111 kilómetros con unas vistas maravillosas en la Prefectura de Oita, ubicada en la isla de Kyushu en Japón. El punto de partida es en la ciudad de Kunisaki, el lugar de nacimiento del beato Petro Kasui Kibe, que fue la primera persona japonesa en visitar Jerusalén y que se convirtió en sacerdote en Roma. En la ciudad de Kitsuki, la ruta pasa por la Iglesia Católica Kitsuki construida en la antigua ciudad del castillo. “El Camino de Oracio” termina en el monasterio trapense de Oita en la ciudad de Hiji, que contiene una reliquia de San Francisco Javier, el primer misionero católico en visitar Japón.

Los autores después de recorrer los últimos cien kilómetros del camino de Santiago en España visitaron y recorrieron parte de esta ruta que enlazaba con el llamado “camino que realizó San Francisco Javier” en Japón. Se recogen aquí relatos de experiencias y reflexiones sobre la cultura de la peregrinación.

PRÓLOGO

Tenemos en el Quijote de Cervantes un personaje que representa la figura ideal del caballero hispánico de su tiempo. Esta imagen del alucinado caballero individualista que superpone la razón mística y trascendente de unos valores cristianos a la realidad material e inmanente parece haber sido olvidada lamentablemente en la actualidad. No se ha actualizado adaptándola a los nuevos tiempos. Don Quijote recorre los caminos de la Mancha, un símbolo de la *peregrinación andante*, con una actitud que nos parece enseñar: a mayor humillación del héroe mayor sublimación. Celoso de la dignidad propia y ajena quiere ser bueno activamente en su ideal altruista.

Hay varios pasajes donde se explicita la importancia de la oración. Por citar uno relevante: en el capítulo veintidós de la segunda parte conocida como la aventura de la cueva de Montesinos, se nos dice que Don Quijote después de ponerse en las manos de Dios "... se hincó de rodillas y hizo una **oración** en voz baja al cielo, pidiendo a Dios le ayudase y le diese buen suceso en aquella, al parecer, peligrosa y nueva aventura...".

Por su parte el humanismo tolerante de Sancho no está exento de gran sabiduría, un realismo que a veces parece superar incluso el idealismo del caballero de la Mancha. En el capítulo ocho de la segunda parte donde se *cuenta lo que le sucedió a don Quijote yendo a ver a su señora Dulcinea del Toboso* podemos leer:

" - ¿Qué quieres que infiera, Sancho, de todo lo que has dicho? - dijo don Quijote.

- Quiero decir - dijo Sancho - que nos demos a ser santos, y alcanzaremos más brevemente la buena fama que pretendemos; y advierta, señor, que ayer o antes de ayer, que, según ha poco se puede decir desta manera, canonizaron y beatificaron dos frailecillos descalzos, cuyas cadenas de hierro con que ceñían y atormentaban sus cuerpos se tiene ahora a gran ventura al besarlas y tocarlas, y están en má veneración que está, según dije, la espada de Roldán en la armería del rey, nuestro señor, que Dios guarde. Así que, señor mío, más vale ser humilde frailecito, de cualquier orden que sea, que valiente y andante caballero; mas alcanzan con Dios dos docenas de disciplinas que dos mil lanzadas, ora las den a gigantes, ora a vestiglos o a endrigos.

- Todo es así - respondió don Quijote - pero no todos podemos ser frailes, y muchos son **los caminos** por donde lleva Dios a los suyos al cielo: religión es la caballería; caballeros santos hay en la gloria.”

(...)

1. 「スペインの巡礼の道を歩く」(二), (三)

HACIENDO EL CAMINO DE PEREGRINACIÓN DE ESPAÑA.

Título en el original japonés: *supein no junrei no michi wo aruku.*

Por Aiko Arai (新井 藍子).

「スペインの巡礼の道を歩く」(二)

(一) 「ポルトガルの道」プロローグ

再びガリシアの地に降り立ったのは、今年(2017年)の四月下旬だった。かぐわしい香りがどこからともなく漂ってきた。一年前にここに来たのは三月半ばだった。今、全てが違って見えた。ガリシア地方特有の光がみずみずしい木々の葉を通して輝いていた。それらの木々からは、黄色い花がゆらゆらと垂れ下がっている。遙か遠く、新緑の山々の稜線にも金色の光が何条かの筋になって突き当たっていた。春の真っ只中にいた。

これから、100キロ強を十日間かけてサンティアゴの巡礼の道の一つである「ポルトガルの道」を歩く私たちを神が祝福してくれているのだと思うと心が弾んだ。去年の三月に「フランスの道」を歩く前は、嬉しさより本当にサンティアゴに着けるのだろうかかと不安のほうを胸を占めていたのだが……。それに、ここガリシアはまだ肌寒かったし、陽光のきらめきが出迎えてはくれなかった。そうは言っても、前回のエッセイにも書いたように、最終目的地、サンティアゴのカテドラルまで無事に歩けたのだから、神の祝福は確かにあったと思う。

スペインのサンティアゴへの巡礼の道には、九つのルートがある。ふつう、「サンティアゴの巡礼の道」といえば、「フランスの道」を指す。この道は、中

世の頃にはすでによく整備され年間五十万人以上が訪れていたと言われていた。現在も道の要所要所にバルがあり、旅人たちの憩いの場となっている。フランスの国境近く、ピレネー山脈を越えてスペイン北部を横断してサンティアゴのカテドラルまで全長 800 キロあるが、中世の巡礼者たちとは違い、現在の旅人たちは、ほとんど聖地の百数十キロ手前から五、六日位で歩く。

今、私たちは「ポルトガルの道」を歩くためにここトゥイに着いたのである。トゥイはポルトガルと接したスペインにある国境の町である。リスボンを出発してサンティアゴの聖地まで全長 600 キロある。この全行程を歩く巡礼者はそれほど多くはない。また、「ポルトガルの道」じたい「フランスの道」に比べると道の途中のバルの数も少なく、今日のように巡礼者の数が増えたのは、ほんの六年ほど前だと言われている。

今度の旅では、同じ道を同じ目的地に向かって歩く巡礼者たちとていねいに言葉を交わし、周りの風景をゆっくり味わい、途上の事物、歴史、伝説、神話、建築物等にも深く関わっていきたく心に決めていた。そのためにふつうの旅程の倍の十日間をかけている。

ガリシアという大地には、長い歴史と伝統、キリスト教にとって何よりも大切な聖地がある。それらが神話、伝説、奇跡に彩どられている巡礼の道を生み出したのである。また、ここには、傑出した文学者が生まれる土壌がある。その意味では、我が国の四国ととてもよく似ている。四国には、全長 1450 キロに及ぶ八十八か所のお遍路に加えて、雄大な自然 深い森、溪谷、剣山を筆頭に数多くの山々、四万十川という透明な美しい川があり、周囲をぐるっと取り巻く海もある。そして、そこは、悠久な歴史、伝説、高名な文学者たちを生み出した土地でもある。

四国を三週間、車と足で縦断、横断したのは、三年前（2014 年）の三月の早春だった。熊野古道を訪れた前年である。四国遍路の弘法大師の寺も数か所であるが、足で歩いて尋ねた。

ある一日、海が正面に眺められる食堂で夕食を摂っていた時の会話をふと思いだすことがある。残照が、静かに凧いだ海に赤くゆらゆらと反映してうっとりするほど美しかった。私の、どうして関東からこんなに遠い四国で仕事をしているの、という問いに給仕をしていていた若い娘さんがこう言った。それは、海に少しずつ沈んでいく四国の夕日にすっかり魅せられてしまって毎日眺めていたいからです。関東では決して見られませんから。…… そうなのか、特別な場所には、他の所では決して見つけれられない、格別美しいものがあるのか。…… 人が一度それを見つけたらもうそこから動けなくなるような美しいもの。それを見つけた若い娘さんは何と幸運なのだろう。でも、人を魔法にかけてしまうような特別なものとか場所は、人の感性によってそれぞれ違うにちがいない。

屋島の山上からは源平合戦があった戦場の壇ノ浦が一望できる。波ひとつ立でずにしんと静まり返った紺青の海は、永遠の象徴のようであった。このように瞳をこらして息をひそめて眺めるということは、誰かが言っていたように、時の流れのプロセスをじっと凝視すること、だと想った。あの時の海は両軍の死者によってどんなに赤く染まったことだろう。そこから敗走した平氏一族が幼い安徳天皇をお守りして祖谷の地に逃れてきたという伝説に思いをはせて、深い祖谷溪谷を下に眺めながら、くねくねしたつづら折りの細い山道を車で走っていた時、もう、春だというのに、雪がちらほら舞い始めていた。ひとつひとつの雪片が平氏の落人たちの魂にも見える。何だか急に胸が悲哀感でいっぱいになってきた。国文科時代から「平家物語」を読む度に包まれてきた思いである。

(二) 「ポルトガルの道」を歩き始める

いよいよ巡礼路を歩き始める前日の午後にトゥイに着いた。まだ日が高く暑

かった。早速、この国境の町の散策を始めることにした。トゥイはポルトガルとスペインの国境の真ん中を流れている雄大なミーニョ川流域に古代ローマが築いた歴史的に古い町である。川に架かっている全長 399 メートルのインタナショナル橋と呼ばれている橋を真ん中まで歩く。ここまではスペイン領である。そこを過ぎるとポルトガルに入ることになるが、国境検問所も何もない。ポルトガルはもともとスペイン領であったが、一度、十二世紀には独立が承認されている。その後、スペインに併合される事態になるが、再びスペインから独立したのは十七世紀になってからである。

橋を渡りきると急な登り坂になる。少し息を切らして登ると十八世紀に築かれ、軍事的な防衛拠点だった砦の門の前に出る。門をくぐって中に入ると、驚いたことに道の両側には土産物店がずらっと並んでいる。客の姿はあまりないが店は開いている。上に上にと登っていくと、やがてミーニョ川がゆったりと流れているのが見下ろせる高台に着いた。川の真ん中から南側がポルトガル領である。ここからならフランス、イギリス、スペイン等の当時の敵の侵入をよく監視できたであろう。この日はあまりにも晴れていたので遥か遠くの青い山並みもくっきりときれいに眺められた。それを背景にして、トゥイの市街地が広がっている。周りの自然にじっくり溶け込んだオレンジ色の瓦の屋根が美しい白い石作りの家々である。家と家の間には青々とした菜園が耕されている。川の両岸には樹木が生い茂り、今、立っている砦跡の地面は鮮やかな緑の苔でびっしりと覆われている。所々に当時のままの砦の壁とか、礎の巨大な岩石が散らばって残されているので、足をとられないように気をつけて歩かねばならなかった。

巡礼の一日目は、昨日と同じように快晴であるが、まだ朝の九時前なので空気がひんやりとしていて心地よい。「カミーノ」の出発地点はトゥイのカテドラルからである。十三世紀に建てられ、十五、六世紀に改修されたロマネス

ク、及び初期のゴシック様式を併せ持っている。外観はまるで要塞のような堅固で素朴な建築物である。西方の門には建築当初からの彫刻がそのまま残されている。旧約、及び新約聖書で語られている預言者、キリストの弟子たち、聖人たちが彫られているが、私には誰が誰であるかを見分けるのが難しい。

中に入ると、それほど大きくないステンドグラスから淡い朝の光が差しこみ薄暗い内部を照らしている。キリストの教えを人類にあまねく照らすといわれているその光を浴びて外に出た。ホタテ貝の道標を探して歩きだす。今日は20キロちかく歩くが、大変だという思いよりも期待感で胸が弾んだ。

しばらく朝の登校で賑わっている市街地を歩いていく。子供を送ってきた父親や母親からガリシア語で「ボン・カミーニョ (良い巡礼の旅を!)」と声をかけられる。「フランスの道」では、スペイン語でベン・カミーノと互いに挨拶を交わした。国籍、年齢、性別、地位など、人間を束縛する諸々のものを一気に解き放してしまう魔法の挨拶の言葉である。街を通り抜けると森の中に入る。鬱蒼とした木々に覆われた細い静まり返った道にほっとする。

途中、アイルランドから来たという初老の女性の二人連れに会う。一人は以前「フランスの道」を100キロ歩いたと少し誇らしげで、もう一人は今度が初めてだとはしゃいだ声でいう。さすがに二度目という女性は歩き慣れている様子で歳を感じさせないようにさっさと歩くが、こちらに追い越されると必ず追い越すというそぶりが見えた。この日は、一日中どこかで出会い、出会えば、互いになっこりして少し言葉を交わす。ふたりは幼い頃からの仲の良い友達で、夫に先立たれ、歩くのが大好きなのであちこち自由気ままに旅をしている。今、カトリック教徒としてカテドラルの聖ヤコブ (スペイン語名はサンティアゴ) の墓参りにこの巡礼の道をお喋りをしながら歩いている、と早口でいうと、すでに先のほうに行ってしまった仲間を追いかけて駆けていく。アイルランドの巡礼者たちといつきの時間を分かち合うことができたことをうれしく思い、彼女らに心の中でエールを送る。

陽光が降りそそぐブドウ畑の中の細い道を歩きながら、また、林の中の限りなくどこまでも長く伸びている、澄んだ水が静かに流れている川岸を歩きながら、星野道夫が繰り返しかえしエッセイで語っている言葉を思いかえしていた。「人と人が出会う不思議さ、ひとときの時間を共有する不思議さ、人生とは、旅とは予測しえない不思議さに満ちた時間の連続である……」

旅が終わってよく考えてみれば、毎日が不思議さの連続であった。だから、人は、こんなに旅に心魅かれるのだろう。

今日一日だけでどれぐらいの旅人たちと友だちのように挨拶し合い、話しをしたらどうか。オランダから来た家族四人のうち一人は、白髪の高齢の女性だったが六キロのザックを軽々と背負っていた。連れは夫と息子夫婦だった。オランダの田舎に住んでいて歩くのは慣れているという。この家族と今日の宿泊地オポリーニョで再会した時は互いに久しぶりの知己に会ったように喜び合った。

日本人にも会った。ポルトガル領のマディラ島で開催された国際マラソンに参加した帰りだという。栃木の宇都宮に住んでいる女性である。或る自動車メーカーで英語の通訳をしているというだけあって、前述の 아일랜드 女性たちときれいな英語を話していた。ザックを背負っていなければこれぐらいの道は走れるのに、と言いながらかなり早いスピードで歩いて行く。その後、会うことはなく何日かして、今どこにいるのとメールで尋ねるとバスの中だと言う。何故、と驚いた私たちに、雨が降っていたのでポンテベドラからバスに乗ったと応えてきた。ガリシアの雨はいつとき激しく降るがバルなどで休んでいると直ぐにやむ。ポンテベドラはサンティアゴまで50キロぐらいの所にある。ガリシアでは大きな街で、バスなら一時間弱で着くはずである。きっと彼女はいつかここに帰ってきて重いザックを背負わずに走りたいのかもしれない。スペインの旅行会社が巡礼の旅の荷物を宿から宿へと運んでくれるという

情報を私たちがおしえてあげたのだから。

林を抜けるとオポリーニョに着く。川に橋が架かっているのが先方に見えた。橋の向こうは、樹木から長く伸びた何重もの太い枝々に覆われ見えなかった。連れが右方向に橋を渡ろうとしたのであわててとめた。道に描かれていた道標の黄色の矢印が直進の方向を指しているのに気がついたからだ。また、数年前に見た名画「岸辺の旅」を思い出したからでもある。映画のシーンには、底が見とおせるほど澄みきった川が映しだされていた。橋は架かっていなかったような気がする。一度向こう岸に渡ってしまえばこちらには再び戻ってこれないのを知っているのに、どんとんと水の中を突き進んでいく主人公。こちらの岸には悲嘆にくれている人がいる。もともと彼はあちらの世界からこちらの世界にいつときやり残したことをするために帰ってきていただけなのであった。映画の冒頭のシーンは、俺、死んだよーと、行方不明だった若い夫がある日、突然妻の元に帰ってきて、さあ、これから一緒に旅をしようと、妻を連れ出すところから始まる。この映画は、生者と死者のふたつの世界が隣り合わせにあるということを再び思いださせてくれる。

私たちはしばらくの間、こちらの岸辺を歩いてまだまだ日の高いオポリーニョに五時前に着いた。長い一日であった。

(三) ガリシア地方の貴族たち

二日目の朝、宿を出発したのは九時を少し過ぎていた。冷たい空気を深く吸い込み今日の一步を踏み出す爽快さ。スペイン特有の紺碧の空を仰ぐ。一日の温度差が十度以上はあるが涼しいほうが歩きやすい。今日は16キロ程度歩くことになっている。最初の数キロは幅の比較的広い道を歩いていく。両側にはガリシア地方によく見られるユーカリプトや松が茂っている。昨日は、初日に

19 キロ歩いてしまったが、幸いに足のどこも痛んではない。

今朝、食堂で会った中年過ぎの男性はがっしりした体格のアイランド人であった。この場所から近いビーゴの空港へダブリンからほんの二、三時間で着くという。ふだん住んでいる郊外を毎日歩いているので、歩く旅が大好きで重いザックも平気だと一人早く発って行ってしまった。その言葉どおり足が速いらしくその後、再会することはなかった。

急に開けた道に出た。モスという歴史的に重要な町である。左側には二階建ての大きな家が一定の間隔をおいて並んで建っている。それぞれの庭にはよく手入れされて赤、白、ピンク、黄色などのバラが咲き乱れている。幅の広い道の右側は一面青い草が伸びたばかりの状態のじゃがいも畑が広がっている。自転車に乗った巡礼の若者のグループがかなりのスピードで何台も通り過ぎる。彼らとは大きな声でボン・カミーニョと挨拶しあう。左の道の端にベンチとテーブルが置かれて休めるようになっていた。そこには、モス出身の現代女流詩人の石像があり、ガリシア語で巡礼者に次のようなポエムが捧げられていた。

世界の果てから ゼロの地点から

白い道があり

巡礼者を導く

世界の果てから ゼロの地点から

サンティアゴまで

きっと、世界の果てにありと思われているさまざまな国の巡礼者たちがこのベンチに座って水を飲み、何かをつまみながらなるほど言い当てているとうなずいたことであろう。……

ちなみに、ガリシア語は古くから叙情詩を語るのに適した言語と考えられ、十二世紀から十四世紀にかけていくつもの優れた文学作品が生まれた。ポルトガル語の母体はガリシア語である。ガリシアの人々はポルトガル語を容易に理

解できると言われている。

少し先に進むとモスの伯爵夫妻のために十八世紀に建てられ、後に復元された荘厳で美しいパソと呼ばれるガリシア特有の館に着いた。入口を入ると資料展示室がある。資料によると、1809年、侵入してきたフランスのナポレオン軍に館近くのモスの住民が殺され、一か月後には、ナポレオン軍は撃退されたとある。ガリシア人は非常に愛国心が強く勇敢なことで知られている。その隣には広々としたサロンがあり、隅の一角にバルがしつらえてあった。サロンは十八世紀風に再現されていた。壁も床も石造りである。床の絨毯の上には数脚の優美なソファ、椅子、低いテーブルが間隔を空けて置いてあり、壁には、伯爵の紋章のオブジェが飾られていた。

ガリシア地方には、様々な理由で零落した貴族たちがいる。ガリシアを代表する詩人として世界的に名を知られている近代の女流作家、ロサリア・デ・カストロの文学作品には、それが巧みに描かれている。スペイン文学を専門に勉強していた留学時代には、おおいに興味をそそられたものである。

前年(2016年)の「フランスの道」を歩いた時に一泊した宿は、町の中心から離れた閑静な場所にぽつんと建っていた。外は蔦が石壁にびっしり一面に張りついていた。長い年月を思わせる、地味などっしりとした建物だが、中に一歩入ったため息がでてしまった。

優雅な貴族の館だった。応接間の暖炉には、ぱちぱちと火が赤く燃えていた。壁には年代物の獵銃が飾られ、十八世紀風の家具、調度品、装飾品が整えられ、華やいだ雰囲気漂っている。それでいて気持ちを落ち着かせるような居心地のよさがあった。四十代位の主人自ら珈琲と手作りのガリシア独特の濃厚なケーキを銀の盆にのせて持ってきてくださった。この館は牧畜を営んでいた彼の祖父が貴族から買い取ったものだという。巡礼の道「フランスの道」の両側には所々に青々とした牧場が広がり、歩いていた時はその牧歌的な田園風

景を心から楽しんだ。牧場のすぐ脇を通っては牧羊犬に遠くから吠えられ恐いおもいもした。彼の祖父もこのような大きな牧場を持っていたのだろうか。

エレベーターのない屋敷なので主人が重い荷物を抱えて二階の部屋まで案内してくださった。エレガントな室内には貴族が休むようなベッドが整えられていた。美しいタイルが張られた広い風呂場は柔らかい照明がついてゆったりくつろげる場所だった。三月半ば過ぎだというのに肌寒く壁際の暖房が暖められている。

バルコニーに出られる扉を開けると、雨に煙っている樹木の多い広い庭が見おろせた。さっきからガリシア地方のこの季節特有のオルバーリャ(こぬか雨)が音も立てずに降っている。近くに森がある。きっとここに住んでいた貴族の何代も前の先祖たちの領地であったのではないか、そしてそこでは度々狩猟を楽しんでいたのではないだろうか、などと思いをはせる。館や広大な領地を手放さざるをえなかった貴族の哀しみが、憂いをたたえたこぬか雨に感じられた。スペイン内乱(1936～39年)の勝利者、フランコ将軍はガリシア出身で首都マドリッドに移る前はこのような大きな館に住んでいたという。しかし、彼は貴族出身ではない。

明日は日曜日なので、ここモスの伯爵夫妻の元館辺りでお祭りがあるらしく若者たちが民族衣装を着こんで準備に余念がない。

巡礼の道は館の脇を通って上へ上へと坂道を登っていくのであるが、今歩いている巡礼者たちは館には目もくれずにただひたすら先を急いでいる。この辺りで激しい戦いがあったことなど知る由もない。もったいないと思いながら真昼の肌を刺すようなきらめく陽射しを浴びながら坂道を登り始める。一人歩きのスコットランドから来たという若い女の子は上着を脱いで袖なしシャツ一枚になってしまった。やがて道は松林の中へと入っていった。日本の松と違って背が高い。林の中はしんと静まりかえっている、木々の枝が重なり合って薄

暗くひんやりしている。時々木立がざわついて風が吹き抜け、松の香りがぷうんと匂い立つ。一気に身体の汗が引いていくのが分かった。永遠に歩いていたいと思わせてくれる天国のような道を数キロ歩いた後、地獄の下り坂が待っていた。大げさに響くかもしれないが、ジェットコースターの真上に立っているような心地で、私たちは呆然と下を見下ろしていた。数名の若い女の子たちが友だち同士らしく声をかけ合いながら平然とジグザグに下り始めた。ああいう風に下りればいいのね、と連れと目くばせを交わして早速真似をしてみた。どうにか苦勞して下り切った所には親切にもベンチが置いてあった。みんな同じ思いをして下りるんだ、ここで一休みしてまた歩き始めるのだと感じいった。そこは小高い丘の上で、前方には一面の広い緑の平野が広がっている。遥か彼方には山が連なっているのが見渡せた。そろそろ四月も終わりにかけている遅い午後の陽光が野の緑にくっきりと濃淡をつけて降りそそいでいる。山の稜線は淡く空に溶け込んでいる。今日泊まることになっているレドンデーラという町はどこにあるのだろうか、瞳をよく凝らしてみるとかなり遠くに集落のようなものがひとかたまり見える。ここから何キロあるのだろうか。相当な距離に見えた。休んでばかりいられないと歩き始めた。何人もの巡礼者たちが話しながら、ベンチに座ることもなくさっきから私たちの横をさっさと通り抜けていた。レドンデーラよりずっと先まで行きたい。丘を下ると思っていたより早く目的地に着いた。まだ日の高い四時半であった。

(四) ガリシア地方の英雄たち

昨夜泊まったホテル形式のアパートの広いリビングには、洗濯機も備えられ、今まで着用してきた衣類を洗濯でき助かった。荷物を宿から宿へ届けてくれる個人経営の旅行会社が様々なタイプの宿を昨年も、今年も予約してくれていた。社長のアントニオ自身、今までに何十回と巡礼の道を歩いていて、巡礼

者が何が必要かを熟知している。昨年の「フランスの道」の或る宿では、ひょっこりと事前に知らせることもなく現れて宿のスタッフをびっくりさせていた。マドリッドから車を走らせてガリシアに来ては、自ら宿をチェックして選び、レストランも同様に試食してから選んでくれるので、毎回美味しいガリシアの郷土料理を堪能している。

三日目のレドンデーラの朝の八時は、くもりで少し肌寒いくらいである。新鮮な空気が心地よい。今日は日曜日なので、街はまだひっそりしているが、一歩カフェに入ってびっくりしてしまった。若者たちでいっぱいなのである。日曜日のまだ朝早い時間に何故と訝しがっている私たちに、「昨夜から近くのバルで飲んだり、歌ったり、踊ったり、一晩中大騒ぎをしていた。それぞれの家に帰って寝る前にここで朝食を摂っているのだ」と言う。彼らは近在の村の若者たちであった。その中の一人が、今から私たちが向かうポンテベドラに帰るので自分の車に乗っていけとしきりに誘ってくれる。「ここからなら 20 キロ弱なので三十分くらいでついてしまう。ポンテベドラの病院で看護師をしている。週末毎に生まれ育ったこの町に戻っては、幼なじみたちと一緒にどんちゃん騒ぎをしているんだ」と話してくれた。

この善良な若ものは、歩くという意味を何も分かっていないらしい。どこかに早く歩いて早く着くのが目的ではなく、着くまでのプロセス、つまり、カミーノそのものを歩きながら、心から楽しめば、よろこびが見えてくるということ。多くの巡礼者もそれを分かっていない。追い越されると追い越すという変な競争心まで芽生えて、互いに大声で今日はどこどこまで何十キロも歩くと自慢し合っているのである。聞いたところによると、最終目的地の大聖堂に着いてほっとしてから、ここまでどんな景色もよく見てこなかった、どんなカミーノを歩いてきたのかもよく覚えていない、と後悔して歩きなおす者が多いらしい。歩きなおすのは簡単に出来るかもしれないが、人生の最終ゴールを目

の前にして、毎日忙しい、忙しいと言いながらいねいにゆっくり生きてこなかった人、本当の生きる喜びを味わってこなかった人が、もう一度人生を生き直そうと思っても難しいだろう。

私の好きな作家、トーマス・マンがある作品の人物にこう言わせている、「..... 生きられるのが一度っきりで、.....、人生のやり直しができないってことは、ほんとうにとっても悲しいことですわ、あれもこれも、もっと上手にやれるでしょうのに。.....」

街を出てから数キロほどは緩やかな上り下りで、やがて葦の中の小道に出る。巡礼の道を歩くのが初めてというレドンデーラ出身の青年と出会う。目的地まで歩けるか心配でたまらないというので、昨年の経験など話して若いんだから大丈夫と励ますが、今まで特にそのためのトレーニングはしていないようである。「フランスの道」では、ただ勢いと若さにまかせて歩き、白い包帯で足をぐるぐる巻きにした痛々しい若者の姿をよく見かけたものだ。夏のシーズンになると、つぶれたマメから汗と泥ほこりのよごれで感染し、病院に運ばれる若者が多いと聞いた。それに反して、日々のトレーニングを積み重ねている中高年はしっかりと自分のペースで最終目的地まで歩いていく。

今日は雨が降ると聞いていたので薄いレインコートは着ていたが、森に入ったとたんに、さっと強い雨が降ってきた。大きな木の下で雨宿りをしていると、すぐにかっと強い日が射し汗がふきでてレインコートを脱ぐ羽目になる。そんなことを二、三回繰り返した森の中は美しかった。雨に濡れた樹木の葉っぱが風にさわさわと揺れて裏表を見せていた。彼方では、今が盛りとばかりにひとかたまりの黄色い花が雨のしずくを滴らせている。やがて左手に樹木の間からビーゴの「リア」が遠くに見えてきた。ガリシア特有の入り江で、水際まで山が迫り、水深は深い。森を下って右手の道を少し行けば、今日私たちが泊まるアルカデの村である。左手に行けば、遠回りになるが海岸沿いにポント

ベドラまで行ける。ここから十数キロはある海岸沿いに今日中にポンテベドラまで着きたいという先ほどのレドンデーラの青年は、急いで道を下って行った。休暇を取って仕事を休んで歩いているらしい。まだ昼を少し回った頃で、私たちはリングをかじりながら入り江が見える高台にしばらく留まった。ガリシア地方ならではの景色をあたかも永遠の記憶の中に封じ込められるようにいつまでも眺めていた。

四日目の朝は快晴だった。部屋の窓近くまで迫っている浜辺は静けさをたたえていた。昨日は、宿に着いてから夕方ちかく突然入り江に黒い雲が覆いかぶさり雨が激しくひとしきり降った。ここから先のポンテベドラまで歩き続けた巡礼者たちは、さぞかしずぶ濡れになったのではないかと思う。ふつう、この村は通過地点なのである。八時頃、朝食を摂っていると外から食堂にドヤドヤと重そうなザックを背負った女の子たちの一団が入ってきてそれぞれ朝食を注文し始めた。今まで静かだった食堂が若々しいむんむんとした熱気でいっぺんに賑やかになってしまった。今、まさに生命感にあふれた青春を生きているという顔、顔であった。フランス語で話していたが、私たちの問いに、今朝早く朝食も摂らずにレドンデーラを発ったのだという。あそこからだと7キロはあるので六時前には歩き出したのではないだろうか。

アルカデを発つと直ぐに待ち望んでいた橋が目の前に現れた。起源はローマ時代、構造は中世期、その後、十七世紀から十九世紀にかけて改造され、十のアーチの橋げたに支えられたどっしりとした美しい石の橋である。それだけではなく、ガリシア人にとって大変重要な橋でもある。前述したモスの住民に撃退を余儀なくされたナポレオン軍がここまで来ると、橋の上で再び熾烈な戦いが始まったのである。1809年、六月七日、八日の二日間でネイ陸軍元帥率いるナポレオン軍を愛国心に燃えたガリシアの住民たちが、貧弱な木製の臼砲の

みで再び撃退したのである。それが間もなくナポレオン軍をスペインから全面的に撤退させることになる。フランスから独立を勝ちとったガリシア人はいうまでもないが、あらゆるスペイン人にとっても重要なこの橋はポンテサンパヨ橋と呼ばれている。

橋を過ぎると道が石でごろごろしている松林に入り、勾配の急な登り坂が数キロ続く。息が切れるほどの坂である。自転車の巡礼者は、ふつう、ここからそれほど遠くない国道を走るらしいが、この道に入りこんで苦労している者もいる。石と石の間に車輪が挟まって仲間に助けられやっと引き抜いたりしてもたもたしている。その脇を徒歩の巡礼者たちがさっさと通り抜けていく。

松林を抜けるとカミーノは広々とした丈の高いとうもろこし畑の中に続いていく。まだ、昼前の透明な光が畑に降りそそぎ、とうもろこしの長々と伸びた葉が左右にゆらゆら揺れている。その時、忽然と目の前にバルが現れた。こんな所にと、びっくりした。まるで水を求めて砂漠をさまよっている遊牧民の目の前にオアシスが現れたようなうれしい気持ちになった。奥に小さな石作りの素朴な建物がある。その前には、ふたつの大きな丸テーブルがしつらえてある広い庭がある。ひとつのテーブルにはすでに十数人の巡礼者たちが大きな声を立てて笑いながら歓談している。迎えてくれた恰幅のいい初老の主人らしい男が愛想よくもう一つのテーブルに案内してくれる。見知らぬ巡礼者たちを仲間同士にさせるという気のきいたはからいであった。席につきながら自己紹介をすると、左には、年輩の体格のよいポルトガル人男性が、大皿に盛ったサラダをワインを飲みながらもりもりとおいしそうに食べている。サラダには生ハムとチーズがのせてある。彼はどちらかというとな無神論者で、一人で今回のように自分のペースで山を歩くのが好きだという。健康のためにもよく歩くらしい。右隣には、カナダから来たという中年の元気そうな、こんがりとした日に焼けた笑顔の夫婦がいた。ふたりで世界中を旅して回るのが好きで、ここを歩いているのも特に信仰のためではないという。

そこへ、案内されて新たに加わったのは品の良い美しい老婦人である。イタリアから来たという。遠くにひとりぼつんと突っ立っていた若い美青年が老婦人に呼ばれてしぶしぶこちらにやってきた。老婦人の長年の夢であったサンティアゴ巡礼にお供をしている心やさしい孫であると紹介してくれた。婦人は熱心なカトリック教徒でカテドラルの聖ヤコブの墓にお参りするためにカミーノを歩いている。スポーツウエアの服装をしているが、二人とも優雅な身のこなし方でどこかイタリアの上流階級を思わせた。いつまでもお喋りがつきないが、今日泊まることになっているポンテベドラはまだまだ遠い。

カミーノの通り道には必ず小さな礼拝堂がある。だいたい20キロ毎にあるようだ。昨年の「フランスの道」にもあった。やはり、カミーノは巡礼の道なのだと思わせる。明確な信仰のために歩いていなくても、礼拝堂の前を通れば誰でも中に入って祭壇の磔刑のキリスト像に手を合わせる。今日も巡礼者でいっぱいだった。少しの間でも祭壇の前に座って敬虔な雰囲気包まれていれば、一体何のために歩いているのか、と問われている気がするのではないだろうか。お祈りをすませた後、目にまぶしい眠気をそそるような春の午後の光を浴びて葡萄畑の中の道を歩き続ける。まだまだ実りの時期には早いらしく黄緑の葉っぱだけが葡萄棚に豊かに覆いかぶさっている。カミーノの脇にある家々の人が畑にでている時は、笑顔で挨拶し合い、二言三言言葉を交わす。巡礼者を日頃から見慣れているせいか、愛想がよく優しい気遣いをしてくれる。もともとガリシア人は、他の地域に比べて性格が柔らかく円満で親切である。一般的なスペイン人が喧嘩早っく、気性が激しいことはよく知られている。道路脇で運転手が互いに早口のスペイン語を機関銃のように発射してタコス—乱暴なのしりの言葉—を浴びせ合っているのを見かけるのも珍しくない。

やっとポンテベドラの街の中心まで目と鼻の先という地点まできた。さきほどから登山靴が足先をじわじわと締めつけてとても痛いの到我慢できなくなっ

た。車の通る広めの道路の端っこに座る場所を見つけるまで少し歩いていく。いい場所を見つけて靴を脱ぎ足先をもんでいると、向かい側の高台の家で庭仕事をしているらしい男性がしきりにこちらをうかがっているではないか。怪訝に思っで見つめ返していると、近くで急に女の子の声が出た。何かお困りですかと尋ねてくる。いいえ、ちょっと休んでいるだけよ、声をかけて下さって、ありがとうございますと応えて向こうを見ると、先の男性がうなずいている。女の子の父親が心配してくれて小さいお嬢さんを寄こしてくれたのだ。ガリシア人の優しい心づかいに気持ちが和んでくる。女の子は少しはにかんだ様子で車の多い道路に向かって走り去った。私たちは父親に手を振ってまた、歩き始めた。

(五) ガリシア地方の第二の聖地

巡礼の聖母マリア様の街として知られているポンテベドラは、また、サンティアゴ・デ・コンポステラの玄関口の聖地としても重要である。古代ローマ人が入植時に最初にしたのは、ポンテベドラの沿岸をぐるっと半円形に囲むように流れているレレス川に第一の橋—ラテン語でポンティス ヴェテリス (古い橋)—を架けることだった。そのラテン語の名前が現在のポンテベドラとして残った。今のブルゴ橋である。巡礼者は必ずこの橋を渡って62キロ、サンティアゴの大聖堂まで歩く。ローマ人は、後には、ガリシア最大の港となる難攻不落の港をここに築き上げた。ポンテベドラがレレス川沿岸の商業都市として繁栄を極めたのは十四世紀から十六世紀にかけてである。ここの出身といわれているクリストファー・コロンブスの新大陸発見の旅に参加した三艘のカラベル船のうちの一つである旗艦、サンタマリア号はこの港の造船所で十五世紀頃に建造された。前の名前をラ ガジェガ (La Gallega—ガリシアの船) といった。

トゥイからポンテベドラまで50数キロ歩いてきた。まだ、うれしいことに半分以上の道のりが残っている。快適に最後まで歩き通すためにここで二泊する予定を立てている。今年の「フランスの道」の時、50数キロ歩いた時点で右の足裏のかかるとに一つマメを作ってしまったのだ。毎晩の治療が面倒であったので、今回はそれを避けたかったし、ポンテベドラの旧市街をていねいに歩き回りたい。ここには、この都市のシンボルとして考えられている巡礼者教会を始めとして見逃せない歴史的モニュメントが数多くある。単に、サンティアゴまでの巡礼の道の途上の街である通過地点として考えるのは実にもったいない。

巡礼者広場にある「巡礼の聖母マリア教会」は、バロック後期及び、ネオ・クラシック様式を併せ持っている。初めて見る者をあっと言わせるような奇妙な外観をしている。サンティアゴ巡礼のシンボルであるホタテ貝の形をして丸みを帯びている様子が少しアンバランスである。対をなすふたつの塔の下には、聖母マリア様（ポンテベドラ県の守護神）、聖ヤコブ（キリストの使徒の一人、スペイン語名はサンティアゴ）、サン・ロケ（十三世紀の托鉢修道士）の像が、それぞれ巡礼者姿で飾られている。内陣もホタテ貝の形をしている。祭壇には優雅な十八世紀のフランス風巡礼姿の聖母マリア様像が祀られている。民間伝承によると、十八世紀の半ば頃にフランス人の巡礼者が、当時のフランスの巡礼衣装を着せたマリア様像を持ち込み、ポンテベドラの民衆に厚い信仰心をもたらした。後に、その像を礼拝するための教会が建てられたそうである。現在まで長い間マリア様は、かいなに巡礼者姿の幼子イエスを抱いて、裾長い衣装に巡礼者が用いるマントを羽織い、杖とひょうたんの水筒を持ち、多くの巡礼者の賛美と祈りに暖かい笑顔でお応えしている。そして、無事サンティアゴの大聖堂まで彼らをお送りしている。

マリア様信仰者にとっては「聖母マリア様出現の教会」も訪ねる価値がある。

以前は、奇跡のマリア様出現のカトリックの聖地として有名なフランスのルルド、ポルトガルのファティマに次いで三大奇跡の聖地の一つとして数えられていたが、現在はボスニア・ヘルツェゴビナにあるメジュゴリエ村のメジュゴリエの聖母に取って替わられた。このポンテベドラの礼拝堂はファティマに密接な関係があるので、ファティマで起こった奇跡にも少し触れておこう。私たちは数年前の夏休みにここを訪れている。ファティマは、スペインの巡礼の道の一つ「ポルトガルの道」の途上にあり、リスボンから100キロ位の距離にある。

今からちょうど百年前の1917年（第一次世界大戦中）五月十三日、読み書きの出来ない貧しい三人の羊飼、ルシア（十歳）、いとこのフランシスコ（八歳）とハシタ（七歳）が近くの丘で羊の番をしていたところに突然、マリア様が現れた。それからの五か月間にわたって六回出現し、三つの予言をお告げになった。それらは全て成就している。たとえば、予言どおり第一次世界大戦はまもなく終結し、フランシスコとハシタは神に召された。1930年には、ファティマは聖地として正式に認められた。今は荘厳な教会も建てられ、ひきもきらずに巡礼者が訪れている。さて、当時、十歳であったルシアの話しよう。聖地として認められる前の1925年、十八歳のルシアは修道者としてポンテベドラの修道院に来た。一年間留まることになる。

現在の「聖母マリア様出現の教会」を訪れたのは五日目の朝だった。まだ人は誰もいなかった。若い健康そうなアジア系のシスターが迎えてくれた。笑みをたたえてカンボジアから来たという。早速ルシアの元独居房で、現在は、礼拝所になっている一室へ案内してくれた。そこへ、顔なじみらしいスペイン人のセニョーラが現れてルシアについて詳しく話してくれた。ルシアは2005年、高齢の九十七歳で亡くなっている。以前ルシアを直接知っていた老シスターたちからセニョーラが聞いたところによると、ルシアはユーモアのある明るい性格で、彼女がいるところ、いつも笑いが絶えなかったという。人を惹きつける

魅力が抜群だったルシアなのでマリア様も引きつけられたのかもしれない。ルシアの小さい独居房にマリア様が、幼児のイエスを伴って数回、現れた。キリスト教のおしえに反する野蛮な行為に満ちた世の中の人々の魂が救われるために、ロザリオの祈りを人々が唱えるように、とルシアにお告げをした。その後トゥイの修道院に移ったルシアの下に、幼子イエスをご出現したとも言われている。

今度のカミーノの途上で出会った巡礼者の多くがサンティアゴの大聖堂の後は、ファティマを訪れる、或いはファティマから歩いて来たと言っていた。それというも前述したように、今年の2017年五月十三日がファティマに初めて聖母マリア様が出現した百周年にあたる。私たちは、その十三日はサンティアゴから帰ってきてマドリッドにいた。テレビには、フランシスコ法王がローマからファティマに到着し、三十万人以上収容できるという壮大なバシリカ前の大広場に埋め尽くされた国籍の異なった大勢の人々から歓声と共に迎えられている様子が映っていた。その日は、世界中の巡礼者にとって特別な日なのである。法王がわざわざ巡礼姿でいらしたのは、聖母マリア様のご出現の真の意味—ほとんど忘れられ、ますます不寛容と苦悩に満ちた荒廃した世界に—「神は苦しんでおられる、何故なら人間が苦しんでいるから」を思いださせるためであった。そのメッセージをカトリック教徒だけではなく、世界の全ての人に伝えるために法王がそこにいらした。そして、百年後のその日、幼くして亡くなった牧童フランシスコとハシントを聖人の列に加えられた。殉教によってではない初めての子供の聖人だという。ルシアが聖人の列に加えられるのはまだまだ先のことだろう。二十世紀の人類と教会の歴史に大きな意味をもたらしたのは、三人の非識字の子供たちであったといわれているが、どうしてこのような神秘的、深遠な示現（神仏が靈験を示し現すこと）が彼らに起こったのであろうか。…… 当時のふつうのポルトガルの家庭では、子供たちはロザリオのお

祈りは両親から教えられていたが、聖書はまだ読めなかった。とても知識が豊富とはいえない無垢な子供たちだった。このように人間界では、人知を超越した不可思議な現象が時々起こるが、人はそれに謙虚に向き合ってもいいのではないか。キリスト教に救いを求めよと言っているのではない。そういう宗教という狭い枠を超越して存在しているものの声に耳を傾けよという、世界で今、この瞬間苦しんでいる穢れなき人に向けてのメッセージとして捉えるべきなのである。

「ポルトガルの道」を歩いて数多くの巡礼者と出会いを重ね会話をしてきてよく思いだされたのは、写真家であり思索家の星野道夫の「……きっと、人はいつも、それぞれの光を捜し求める長い旅の途上なのだ」(長い旅の途上)という言葉であった。ここでいう「長い旅の途上」が巡礼の旅の途上に重ね合わされて胸に響いた。巡礼者が求めているものもそれぞれ異なっていた。だが、今より良く生きるための何かを求めていることは間違いないだろう。

(六) アルベルゲの仲間たち

六日目の朝、九時半に宿を出る時、マディラ島から来たという巡礼者のグループと一緒にになった。昨夜、食堂でワインをたくさん飲んで酔っ払って騒いでいた二十数名の若い男女のポルトガル人である。登山の愛好家らしく男女とも頑健な体格でそれぞれ重そうなザックを背負い、速足で歩いて行ってしまった。

朝の空気は爽やかでスペイン特有の紺碧の空の下、歩いていても自然に心が弾んでくる。直ぐに巡礼者広場に出る。巡礼の道の途上にあるので、信仰がそれほど厚くない巡礼者でも立ち寄っていくのが「巡礼の聖母マリア教会」である。私たちが入ると入れ違いに先の男女のグループが出て行った。中は薄暗かったが、朝のかすかな光に巡礼姿の神々しい柔らかなマリア様のお顔がほ

うっと浮かび上がっていた。巡礼の道を一緒に歩いていますよと、ささやかれている気が一瞬した。

レレス川に架かっているブルゴ橋を渡ればポンテベドラの街の外である。最後の修復がいつ行われたのか分からないが、石造りのかなり古く見える長い橋で、両脇に間隔を置いて立っているランタンも風情がある。途中、何回か立ち留まっては紺青色のゆったり流れている川を眺めながらナポレオン軍を壊走させたガリシア人に思いをはせた。渡りきった所で、後ろ髪を引かれながらポンテベドラに別れを告げる。住みたいと思わせるような街であった。また、来よう。

ぶどう畑の中の道をラトビアから来たという一人歩きの女性と一緒に歩く。中年を少し越した位の歳だがザックを背負い元気いっぱいにかなり速く歩いていく。遠い国から様々な年齢と様々な理由で女たちがひとりきりで歩いているのに度々出会ってきた。きっとふだんからタフな生き方をしているのだろう。彼女らと話していて気づかされたのは、女性にとって一番の美德は優しさではなく、ひとりでもどこまでも歩いて行ける逞しさであるということだった。それは、幸福な生への強い意欲からきているのではないかと考えさせられた。ラトビアの女性は、今夜泊まるアルベルゲを探していた。アルベルゲとは、巡礼者用の宿拍施設で道の途上の街にある。大きな一室にずらっとベッドが並べられている。巡礼者に必要なシャワー、キッチン、冷蔵庫、洗濯機などが備えられている。市運営の公的なものと民間の両方がある。公的なものは、無料か維持費として五ユーロ、寄付金程度である。あるアルベルゲでは、巡礼者の無事な旅立ちを祈るための夕べのミサが毎日行われている。それだけではなく、宿泊者全員が参加して共に夕食を作って食べ、歓談するような場所を提供している。そこは、それぞれの言語、それぞれの背景を背負った巡礼者が出会い、笑い、ひとときを共有する場所なのであろう。誰も予想しなかったような物語さ

え生まれるかもしれない。出会った多くの巡礼者がまた来たい、もう何度目だというのを聞いても分かる。

スペイン人男性の四十を少し過ぎた位のフェリックスもその中の一人だった。家族との葛藤を抱えていた。初老の父親は認知症になりかかっていたし、妻とも思春期の娘とも心の行き違いがあった。「本来の陽気な自分を取り戻して新たな気持ちで家族と共に人生を歩みたい、サンティアゴがそうするようにここに呼んでくれたんだ、道の途上ではいつもアルベルゲに泊まっていた。夕食の時に初めての巡礼者たちと昔からの仲間のように何でも話せてよかった。日中はいつも一人で歩いていて孤独を感じていたが、アルベルゲに来ると心を許せる仲間が誰かしらいた」と語っていた。毎回ルートを変えて今回で三度目の巡礼の道を歩いている。次回の道を予定していて、一番難しいと言われている「プリミティブ・ルート」を歩くそうである。何故そんなにカミーノを歩くのに魅かれるのか……それは、ここに来るたびにすぐに見失ってしまう自分自身を再発見できるからという。

ガリシア出身のディリアという女性もアルベルゲの仲間の一人でフェリックス同様、今回が三度目で、毎回異なったルートを歩いている。次は「イギリスの道」を歩くそうである。誰もかれもあわただしい永劫的な繰り返しの日常生活を送っていると魂が枯渇してしまうということらしい。100キロ程度を五日間位かけて新しい道を歩いて、未知の旅人たちに出会えば誰でも自然に気持ちが高揚してくるだろう。そして、再び魂がいきいきと動きだせば、普段の暮らしにすんなりと戻れるのではないだろうか。……サンティアゴ（聖ヤコブ）が呼んでくれたというフェリックスには神への信仰心があるようだ。どんな道でもいいからというのではなく、やはり、神へと通じる祈りの道を歩くことに意味があるようだ。

ディリアは十六年間、ベネズエラに住んでいた。今年四十歳になるのを機に、故郷のガリシアに戻ってくるという。彼の地では、船医だったそうで七か月間は、船で生活を送っていた。ここでの新しい人生を始めるためにもカミーノを歩く必要があったという。アルベルゲの仲間たちは、きっと、今頃は、それぞれの新しい道を颯爽と歩き始めているにちがいない。……

ディリアと同様に四十歳の誕生日を迎えて折り返し地点に着いた、新しい何かを見つけない、今までとは違う生き方をしたいと願っていたスロヴェニアの男性はどうしたであろうか……。これからの、まだ半分以上は残されているであろう時間を新しい景色を眺めながら軽快に歩き続けられればよいと私も願う。

(七) 人生の節目

七日目の朝も気持ちよく晴れて、光の粒子が青さをたたえた上空にきらきら舞っている。今年のガリシアの春は雨が少なく、暑くて天候がおかしいという。たしかに午後になると、二十四、五度まで上がって歩いていると汗をかく。

今朝はよくオランダ人、ドイツ人に会う。ポルトから歩き始める人が多い。それぞれの国からポルトまでの直行便があるせいだろう。ドイツ人によると、三日前に日本人の夫婦連れに会ったという。「フランスの道」の時は、何組かの日本人の団体ツアーと一緒にだったが、このカミーノではまだ一組も会っていない。六年位前から巡礼者が少しずつ増えているというが、今はまだ閉まっているバルが多い。六月から十月末までが「ポルトガルの道」のシーズンだそうで、その期間中は、多くのバルもオープンし、巡礼者で賑わうにちがいない。

今日の宿泊地、カルダス デ レイまで後半分の地点にきれいな滝がある。

カミーノから少し離れているが、急ぐ旅ではないので寄ることにしてそちらに向かって歩き始めると、そっちではないよーと後ろから誰かが呼んでいるので振り返ると数人の巡礼者たちであった。分かてるよー、滝まで寄り道していくから後で会おうと、こちらでも大声で応える。カミーノから少しでも外れるとお互いに注意しあうのが巡礼者同士の暗黙の了解みたいだ。黄色い矢印の道標は数百メートル毎にあり、まず迷うことはないが……。

カルダス デ レイにはよく知られている湯治場が二つある。十八世紀から十九世紀の初めには開かれていたという。巡礼者の歩き疲れた足のためにも、もちろんよく効くが、スペインのあちこちからリュウマチ、関節炎、神経痛などの治療で多くの患者がやってくる。

その一人、元教師のアルフレッドと夕食の食堂で知り合う。七十代の前半位でリュウマチの治療のため五日間、六百ユーロを支払い、医師の指導の下、朝から温泉の治療を受けている。私も試してみたところ、激しく渦を巻いて泡立った薬湯は筋肉をほぐし、脚の疲れをとってくれた気がした。サンティアゴまで四十数キロは残っている。ゆっくり温泉につかって目的地まで歩けるようにと旅行会社のアントニオが気をきかしてくれた宿である。

アルフレッドは二、三日前にここに着いたそうで家族のこと、自身の病い、以前の仕事、信仰などを私たちを前によく喋った。今まで話し相手がいなかったのかもしれない。当時も、今でも愛しているのに、妻の希望で離婚していてポンテベドラの郊外の自宅にひとりで住んでいる。「息子と娘が一人ずついてよく訪ねてくれる、近所にも親しくしている人がいる。だから、もっと高齢になってもこのまま自宅で過ごしたい、老人ホームに入るのは厭だ」と、いつまでも話しは尽きない。普通のスペインの晩ご飯どおり八時半に（九時以降オープンのレストランもたくさんある）始まったが、もう十時を過ぎている。こういう湯治場に妻が付き添っていない侘しさが瞳の奥にちらっとよぎる瞬間があ

る、メールを交換して明朝早いので、と別れた。今度お体の調子は如何ですかとメールで尋ねてみないと……人を知るということはどういうことなのだろう。絶えず流れていく時間のひと時をとめて人を認識し、記憶し、再生させることなのだろうか。……そうすると、人を知れば知るほど記憶の層が厚くなり長い時間を得られることになるのかもしれない……

八日目の朝、宿の部屋の窓から外を眺めると、中世に架けられたという橋をすでに数人の巡礼者が渡っている。カルダス デ レイは随所にローマ時代の建造物の遺跡が残っている古い歴史を抱えた味わい深い街である。

橋とは反対方向のローマ時代の石畳の道を歩いて森の入口に着く。あのグリムの童話によくでてくる人を誘うようなちょっと怖い、精霊に満ちた森の佇まいをしている。入ると美しい道が続いていて怖いどころか爽快感がひたひたと押し寄せてくる。おとぎ話の世界でうっとりしながら歩いていると、大声のスペイン語でその夢が突然消えてしまった。重そうなザックを背負ったふたりの女性に追い越された。あわてて挨拶に応じて会話が始まる。南米のコロンビアとメキシコ出身で二十八歳、リナとクリスティーナである。現在はカナダにある金融機関に勤める同僚で、有給休暇をもらって歩いている。リナは休暇を取れなかった夫をカナダに残してここに来た。コロンビアの家族ともよくスペインの巡礼の道を歩く、カトリック教徒だからという。それだけではなく、二人とも人生を楽しみたい、何か目新しく興味を引くものを見つけたい、知らない人と出会って会話をすることにより今まで知らなかった経験をしたい、視野を広げたいなどと、ここにいる動機を語ってくれた。

リナと別れて辺りを見渡しても、クリスティーナと先を歩いていた連れの姿が見当たらない。お互いを見失ってしまったのだ。後できくと、連れはとても慌てたらしかった。それも中途半端なあわてかたではなかったのが巡礼者たち

の言葉で分かった。私の方といへば、悠々と巡礼者が必ず通過するであろう丁字形の角のベンチに座ってリングをかじりながら連れが通るのを待つことだった。先には行っていないという直感があった。暫くすると、数人の巡礼者たちが前を通りかかって日本人女性を探している人がいるという。それから誰かが通りかかる度に同じことを言う。三十分位辛抱して待っていると、とうとう連れが姿を現した。私を見て心底ほっとしたような表情をする。探しているうちにカミーノから外れてしまったと聴き、何だかおかしくなってしまった。同時に、出会ったあらゆる巡礼者に日本人女性を見たか尋ね回ったそのあわてぶりが、須賀敦子のエッセイの中でも特に好きな「アスフォデロの野をわたって」の彼女と重なった。休暇で訪れたソレント近くのギリシャ神殿の遺跡で夫ペッピーノの姿が見えなくなるとりみだす須賀に友人が驚く。彼を探して歩く須賀敦子は、好きな「オデュッセイア」の一節を思い浮かべる、

アキレウスは、アスフォデロの野を

どンドン横切って行ってしまった

後に彼女は「アスフォデロ」が「忘却の野」という意味であると知る。ペッピーノはその年「……声もかけないでひとり行ってしまった」その後、何年も経って須賀敦子は、「私は、孤独が荒野ではないことを知った」というまでに回復していく。そして心にしみるようなエッセイを次ぎつぎと書いていく。

にわか雨で雨宿りしたバルで私たちを見た巡礼者たちが少し揶揄するように連れに声をかけてくる、よかったねー、会えたね、随分、さっきは心配していたから……連れも照れくさそうに有難う、会えなかったらどうしようかと思っていた、と小さな声で応える。

コーヒーを飲み、サラダを食べている間に雨は上がり、巡礼者たちがブエン・カミーノと互いに挨拶し合って次々と外に出て行った。

雨に濡れたとうもろこし畑の中の細い一本道の先の方に彼らの姿が見える。

真昼の陽光が上空から降りそそいでいる。とうもろこしの茎の葉っぱからは、水滴が光の中に何億というきらめきを放っている。みずうみの様な田畑の上に風が渡るたびに青くさい芳香があちこちから漂ってくる。

暫くして、オピノのアルベルゲに着いた。ここで休憩することにした。建物の前には若い男の巡礼者像が飾られている。片方の靴を脱いでマメを調べている姿がいかにもリアルで面白かった。その横では、生身の若者が同じような格好をしてマメを治療している。マメがつぶれて痛々しげな様子である。何か軟膏は要らないか、と問うと、ここまでポルトガルからすでに数百キロは歩いている、慣れているのでこのままでいいという。「ザックが重すぎるので歩いていてもあまり楽しめない、今度はもっと身軽に軽快に歩きたい」と、若々しく笑って足の痛みをあまり気にしていない。クールなカットをした今風な若者で、二十八歳、リトアニア出身だという。リトアニアは人口三百万強、バルト海に面していて、ポーランドにも近いらしい。そうか、頭の中に地図を描いてどこにあるかを探っていく。IT企業に勤めていたが、仕事に追われる毎日で何故生きているのかが分からなくなってきた、生きていることの意味を見つけない、どこで、何をするかをもう一度探したい。そのために会社をやめて、こうしてカミーノを歩いているんだ、答えを見いだすためには足の痛みなど何でもない……。それどころか、生きている実感があるとまでいう。それに対して、小声で連れがこう言っているのを耳がとらえてしまった。僕は、この人に会って、生きることの意味も、どこで、何をするかも分かった。……後で連れが更にこうつけ加えた。今まで黙っていたが、私のためにずっと頑張ってきたと……。

初めて会ったのは、もう四十数年前の遙か昔、マドリッド大学で連れは、まだはたち前だったのではないだろうか。しかし、いつもふたりで話しているの

は、まるで昨日のことのようである……と。歳月の流れは実に早い。この若者はきっと、三十歳になる前に新しい人生を見つけないのであろう。人には、それぞれの人生の節目があるのだ。若くても、老いても、歳に関係なく、長い人生の途上で、人は何回か区切りをつけて新しい生き方を模索するということが、生きる意味を問い続けているということのカミーノを歩く多くの巡礼者がおしえてくれた。

「サンティアゴの巡礼の道を歩く」(三)

(一) 聖なる森—イリア フラビア

九日目の朝九時半、爽やかな風が頬をなでる山里の細い一本道を歩いていく。頭上には、ほんのりとした青さをたたえた空が広がっている。やがて、日々の暮らしを大事にしているのが分かるような佇まいのきれいな農家が並んでいる道にでる。庭園には、色とりどりのバラ、草花を咲かせ、ジャガイモ、トマト、ピーマンなどが栽培されている。この地方のピーマンは伝説になっているほど有名である。十六世紀に南米からもってきたもので、色は濃いグリーンでつやつやしている。小ぶりであればあるほどおいしいという。オリーブオイルで柔らかくなるまで炒めて塩をかけて食べる。八月には、ピーマンのフェスタまでである。農家の白壁には、聖人の像やファティマの奇跡のマリア像が飾られている。

今日の宿泊地パドロンまで2キロという地点にしゃれたバルがあったので休憩することにした。昼を少しまわった時刻である。

バルの主人が自らこしらえた美味しそうなサラダを給仕してくれた。何もかもひとりきりでやっているらしい。五十代前半位のボヘミア風の風貌で知性の感じられる眼が少し寂しげなのが魅力的である。あの生きていることの意味を

みつげたいと言っていたリトアニアの青年の未来を彼に見たような気がした。巡礼の道の途上にバルを開くまでどれくらい世界を放浪し、カミーノを歩いてきただろう。エージェントのアントニオと同じように何十回となくいろいろのルートを歩いてきたようである。このバルは必ず巡礼者が通る道の角にあって、誰でもちょっと入ってみようという気になる造りなのである。店内にいた巡礼者の質問にいてねいに応えているのを見てもカミーノを熟知しているのが分かる。巡礼者の手助けをしたいという気持ちが微かな笑みに現れていた。誰にでもこんなに親切な主人がひとり歩きの女性の巡礼者にやさしくふるまって今までどれくらいの想いを寄せられたのだろう。しかし、店内は雑然として細やかな女の手が入っていない様子である。暫くの間共に暮らしていた、風のように自由きままな独立心の強い女性が最近、自国に帰ってしまったのか……。それとも、若い時から追いつけてきた広い世界で自由奔放に生きるという夢をこんなに小さい空間で終わらせる哀しみからだろうか……。あの主人には憂愁の陰がちらほら見える。

パドロンまでの道は、いつものように森の中、畑の中を歩いて歩きやすく、都会では味わえない自然の放つ無垢な精気を細胞のひとつひとつで吸い込んでいく。途中、カナダ人の老夫婦に会う。ポルトから歩き出して、すでにこの地点で二百数十キロになるという。夫はもう八十になるのに疲れ知らずだと夫人が愛おしそうに微笑む。去年は日本にも行ったという旅行好きで健康に恵まれた幸せそうな夫婦である。今回の巡礼の道では、敬虔なカトリック教徒の夫人が、もっと魂を豊かにさせる何かスピリチュアルなものを神に求めて歩いているらしい。ご主人はそういうことには関心がなく、ただ夫人にやさしく付き添って歩いているらしい……。

お喋りしていたら、直ぐにパドロンに着いてしまった。午後三時だった。

「サンティアゴ教会」前に広い長方形の広場があり、ガリシア出身の二人の文学者、カミロ・ホセ・セラと前述のロサリア・デ・カストロのかなり大きい石像が距離を隔てて向かい合って建っていた。

カミロ・ホセ・セラは、1989年にノーベル文学賞を受賞している。1916年に生まれ、スペインでは、去年から今年にかけ生誕百年を祝って、大学などで何回も講演が開催された。スペイン内乱（1936～39年）直後の42年の荒廃した貧しいマドリッドを舞台にした群像劇「蜂の巣」（51年）はユニークな文学作品で内外で高く評価されている。ストーリーの大部分は、女主人、ドニーャ・ロサのカフェで展開される。登場人物はなんと三百人以上、うち五十人は実在の人物であるという。カフェの常連客と彼らに関わっている人物たち、及び、カフェの従業員であるウエイターと店内で演奏するバンドのメンバーたちの惨めで貧しい日常生活の現実が、ひとつ一つ作者の厳しい眼と共に愛おしいという想いで描かれている。これらの登場人物たちの平凡な生活には、深刻な悲劇は起こらないが、また、大いなる幸福も成功ももたらされない。ただ、単調な息のつまるような生活が毎日繰り返されるのみである。この小説のテーマは、いつの時代にも大部分の庶民に当てはまるのではないだろうか。だから今、読み返してみても面白いし、普遍性がある。

十日目の朝、パドロンの「サンティアゴ教会」で十時のミサがあった。ミサが終了してから教会を案内してもらう。中央祭壇の下には大きな石柱がある。伝説によると、エルサレムで殉教したサンティアゴ（聖ヤコブ）の遺体を運んできた舟をつないだ柱だそうだ。

現在のパドロンは、古代ローマ時代にはラテン語でイリア・フラビア（Iria Flavia）と呼ばれていた港町であると同時に商業の町でもあった。パドロンは石柱、イリア・フラビアは豊かな水をそれぞれ意味している。それらの名前が象徴的に異なった時代に名付けられたことが分かる。石柱は、元々は、ローマ

神話に出てくるネプチューンを祀っていた聖石であった。このように、地名には、古代の神話、歴史が浸透していることが多々ある。だから、人は地名を見聞きしただけで遠い過去にまでさかのぼって一挙に時空間が広がるのを感じて、その土地にいつそう心魅かれ、愛着がふつふつと心底からわいてくるのである。

サンティアゴ デ コンポステラの現在の大聖堂はローマ人の墓の上に建っていることが発掘調査によって最近、確認されている。コンポステラという言葉はラテン語の「Compositum—墓場」からきているという説は、前回すでに書いたが、現在はこちらのほうが有力だそうである。

エルサレムから舟で運ばれてきた聖ヤコブの遺体はローマ人がイリア フラビアの港から自分たちの墓場に移したとされる。その距離は25キロ弱あり、当時はその一帯が靈魂及び、万物の精気に満ちた樹木の密生した神秘的な原野であったという。

教会の外に出て、上へ上へと登っていくと小さな礼拝堂に着く。中には入れないので、外の小さな格子窓から目をよくこらして覗くと、ほのかにサンティアゴの像が見える。ここで弟子たちに説教をしたと言われている。窓の下にちょろちょろと流れている泉がある。サンティアゴが杖で地面をとんとんと突いて湧き出た奇跡の泉だそうである。サンティアゴがこの地で説教したという史実はないようだが、遺体が弟子たちによってパドロンに運ばれて来たというのは本当たらしい。十二世紀のカリクスト (Calixto) 法王が法典に詳しく書き記している。

(二) 奇跡の泉

パドロンを出発したのは、昼近くである。この時刻になると、陽射しが強く暑い。歩くのは朝早くがいい。途中で前述のノーベル文学賞作家、カミロ・ホ

セ・セラの墓碑がある教会に立ち寄りお参りする。教会の門前には水飲み場があり、「豊かな霊水」に恵まれているこの地を象徴するようにミネラルが豊富な甘露のような天然の水がいつでも流れている。はるか昔の巡礼者にとっては心身を潤す命の水であったにちがいない。現在では、近隣の住民がボトルを抱えて来る。わざわざ車でくる人も多いという。汗をかいた後の水は格別おいしかった。

僅かな距離の所に別の奇跡の泉がある。民間伝承によると、1582年、木を伐っていた司祭が、事故に見舞われたが無事だった。そこで、公道の脇にあった泉の傍に聖母像を祀って、感謝の祈りを熱心に捧げた。それからしばらく経った1732年に、浮腫を患っていた近くの村の男が、サンティアゴの病院に運ばれることになり、その前を通りかかった。泉の水を飲み、マリア様に祈ったところ奇跡が起り、病が本当に治ってしまったという。男は思わずこう叫んでいた、「マリア様のおかげで囚われていた病から解放されました」。そこから、この村はア エスクラビトゥー A Escravitude (囚われの身) と呼ばれるようになった。それ以来、この話を伝え聞いた村落の病人たちが大勢集まってくるようになった。現在の場所に、二つの塔があるバロック様式の「聖母礼拝堂」が建てられたのは、1750年である。

階段を登って礼拝堂の前に着くと、近在の村人らしい人が、盛んに二人の若い男の巡礼者に早口のスペイン語で何かを説明しているのが目に入った。巡礼者たちは脇に重そうなザックを置いて、靴を脱いで足をもんでいる。村人のスペイン語がさっぱり分からない身振りをし、若者同士顔を見合わせてドイツ語で何かをしゃべっている。村人がめざとく私たちに気がついてすぐにこちらにやって来て話し始めたのは彼自身の神秘的な体験である。ここを訪れる誰かれをつかまえてはその話しをしているらしいということが分かった。

現在、七十九歳のサンチェスは、バドロン出身で十年前まであらゆる仕事をしてきた。畑を耕したり、市場で物を売ったり、ノルウェー船では、長い間ウ

エイターだった。長年連れそってきた妻を亡くしたのは、仕事を止めた前後である。これから、ふたりでゆっくり残りの人生を過ごそうと思っていた矢先であった。深い喪失感と悲しみに襲われたサンチェスは、パドロンから6キロあるこの聖母礼拝堂で妻のために祈りを捧げた。毎日、毎日寒かろうが、暑かろうがどんな天候にもめげずマリア様に妻が天国で幸せでありますようにと祈り続けた。妻の人生は忍耐と苦勞の連続であった。そして、数年前の或る日、聖母マリア様がサンチェスの目の前に突然現れた。自宅の居間の壁に映像のようにぼうっと浮かび上がっていた。それからは、礼拝堂に行く必要はなくなった。マリア様のほうからいらして下さったのはとても有り難かった。当時、サンチェスの片方の膝が悪くなって杖をつきつき歩いていたからである。三年経った或る日、マリア様が初めてサンチェスにこう話しかけられた、「セニョーラは私のそばでとても幸せにしています。もう、そんなに祈り続けなくていいですよ」……。

手元に、一枚の写真がある。サンチェスの風貌はイノセントで幸せそうである。作り話をしているようでも、頭がおかしいようにも見えない。当時は、テレビで語ったり、メディアのインタビューを受けたりと大変騒がれたそうである。宗教関係者の反応は半々だそうで、信じてくれるパドレがいることにサンチェスは満足しているという。

(三) サンティアゴ大聖堂への道

十一日目、ついに今日は、最終目的地サンティアゴ・デ・コンポステラに着く。嬉しい気持ちより寂しさに胸がいっぱいになる。二、三日前からその思いにつつまれていた。生に必ず死が訪れるように、始まりがあれば、必ず終わりがくるという寂しさである。

途中で、「フランスの道」全長 800 キロを歩いたという六十代位のスロヴェ

ニア出身の女性マルヘッタとかろうじて並びながら話して分かったのは、スロヴェニアにも同じような長い巡礼の道があり、彼女はそこの「巡礼の道、友の会」を運営しているということだった。サンティアゴとの関わりも深く、今回、サンティアゴで開催される講演に講師として招かれて巡礼者にファティマの奇跡の意味を話すことになっている。講演が終わったらすぐに、ファティマまで行き、聖母ご出現百周年の祝典に出席することになっている。前述したように、祝典には、フランシスコ法王がひとりの巡礼者としていらっしやる。

その後、出会った若い三人づれのインドネシアの女性たちも同じように、サンティアゴに着いてからファティマに行くという。

「ポルトガルの道」が夏休み前の五月に巡礼者が多い訳がやっとわかった。ファティマに行くにはこのルートがいちばん行きやすい。今年の五月は特別なのである。三人づれは彼の地では、わずかに四パーセントしかいないカトリック教徒の少数派に属する。いかにも楽しそうにおしゃべりしながら活発な足取りで行ってしまった。三人は深い信仰心で結ばれているようである。

昼もだいぶ過ぎたいちばん暑い時間、もうサンティアゴまですぐだ。ポルトから 240 キロ歩いてきたという年配のドイツ人男性ふたりは少し疲れた様子でしばしば休憩をとってはまた、歩きだす。同じようにポルトから出発したというイタリア人三人づれは重いザックを背負っているにもかかわらず元気である。今回の巡礼は二度目だそうである。ヨーロッパのそれぞれの空港からポルトまで直行便があるので便利だという。この「ポルトガルの道」を歩いて気づいたのは、みんな足達者であり、特に、ポンテベドラからここまで、足を痛めて座りこんでいる巡礼者が誰もいなかったことである。また、「フランスの道」の時には、親に連れられた子供が多かったが、ここでは見かけなかった。

(四) 免罪の門

翌日、カテドラルの十二時のミサで神父様が巡礼者を前にして、聖サンティアゴに次のような感謝の言葉を述べた、「ここまで巡礼者をお守りして下さった聖サンティアゴに感謝いたします、彼らがキリスト教精神に満たされてそれぞれの家に戻れますように、そして、これからも神の栄光を称えるためにキリストの御心と共に生きることができるようお願いします」……。天井に吊り下げられていたボタフメイロー巨大な提げ香炉が前後に、最初は小さく、だんだんと大きく揺すられ、大聖堂のすみずみにまで浸透するような強烈なお香の芳香が漂い始めた。先ほどの神父様の言葉を胸に大事にしまいこんでいた大勢の巡礼者は陶然とした面持ちになっていた。以前、公共の宿泊施設がなかった頃、800キロを歩いてきた巡礼者の汗と汚れの臭いを消すために香をたきはじめたそうである。

カテドラルの裏側のキンターナ広場に面したところに「免罪の門」(プエルタ デル ペルドン)、或いは、「聖なる門」(プエルタ サンタ)と呼ばれている門がある。1611年に創建された。上段の中央にはサンティアゴの像が据えられ、左右にはキリストの十二使徒及び、預言者像がそれぞれ飾られている。下段の左右には聖書で語られている人物像が十二人づつ配置されている。極めて複雑で豪華な門である。

今年は、その門は閉じられていた。昨年、2016年、三月下旬には、幸運にもその門をくぐることができた。門を少しあけると、隙間から朝の太陽が射して薄暗い内部の床に柔らかくあたった。ちょうど、太陽の光線が反射する部分に朝日が描かれている。早朝の太陽が昇りはじめたのである。上部にはラテン語で「ここは神の天国の家への門」であると書かれている。巡礼者の終着点であるカテドラルの「免罪の門」をくぐることにより、今までの全ての罪が許され、清らかな魂と共に新たな人生を始められるという。

昨年、カトリック教会が「慈悲—ミゼルコルディア—の聖年」を宣言した年で特別にこの「免罪の門」が開かれた。普段は閉じられている。門が開くのは七月二十五日の聖サンティアゴの日が、日曜と重なる聖年のみで、次は2021年まで待たなければならない。

旅が終わって面白かった、よかったと思うのは、思いもかけなかった出会いがあった時と、偶然の幸運に恵まれた時である。昨年の、「免罪の門」をくぐって、門内に射しこむ朝日を全身に浴びた瞬間のなんとも言えない清々しい気持ちは、事前に知らなかっただけにより一層強く感じられたのであろう。今年の巡礼の道では、奇跡を体験した人に出会えたように、それぞれの物語を抱えた多くの人たちと予想しなかった出会いに恵まれた。偶然に左右される旅は、だから、やめられない。

(五) エピローゲー—古都レオン

諺の「全ての道は、ローマに通ず」のように「全てのヤコブの巡礼の道」は、サンティアゴ・デ・コンポステラの大聖堂に通じる。巡礼の最終目的地であるスペイン最高のロマネスク様式の荘厳な大聖堂である。

神に遣わされた天使たちは、モーゼをエジプトから連れ出し、イスラエルまでずっと旅の間、モーゼを守り、導き、モーゼにつき従った。それらの天使たちに捧げられた祭壇が大聖堂にある。同じように、私たちが巡礼の旅の始めから終わりまでずっと、天使たちに守られていたような思いがして、ごく自然に祭壇の前に額ずいてしまい感謝の祈りを唱えていた。

巡礼者たちは、旅が終わればそれぞれの場所に立ち直されて帰って行くのだろう。

サンティアゴ・デ・コンポステラから300キロちかくある、中世には、「フ

ランスの道」巡礼路の要所であった古都レオンに列車で向かった。「レオン」(ライオンという意味)の語源は「レギオン—軍団」から来ている。古代ローマの第七軍団によって紀元70年頃占領され、その後、数百年にわたってローマ人の植民地であった。

古都レオンには、重要なモニュメントが多いが、その中でも、十二世紀に巡礼の道の脇に創建されたサン・マルコス修道院は巡礼者にとって重要である。修道僧たちが巡礼者を保護し、病院の役割も果たしたのである。そればかりではなく、レコンキスタ(国土回復戦争)でイスラム教徒を相手に戦っていたサンティアゴ騎士団の宿泊所でもあった。

十六世紀に現在の場所、サン・マルコス広場に再建された。今のパドール・デ・レオンである。アメリカ映画「星の旅人たち—The Way」にも登場したプラテレスコ様式のファサードがひととき美しい建物である。サンティアゴ巡礼のシンボルである無数のホタテ貝が壁一面に彫りつけられている豪華な建築物は、レオンが「巡礼の道」の要所であるということを誇示しているようである。

しかし、サン・マルコス修道院には悲劇的な歴史の一面があった。スペイン文学の黄金時代(十六～十七世紀)の巨匠フランシスコ・デ・ケベードが四年間その牢獄に幽閉されていたし、スペイン内乱(1936～39年)の時には、収容所として使われていた。

強大な力を持っていたこの修道院は、創建当時から数世紀の間、小都市そのものの形態を有していた。農園、家畜小屋、鶏小屋、食料倉庫、酒蔵、牢獄、修道僧及び騎士団宿泊所、使用人部屋などが修道院の広大な領地内にあった。

現在は、世界中からやってくる巡礼者の宿泊所として創建当時の目的をしっかりと遂行している。

レオンの大聖堂は、スペインに数多くある大聖堂の中でも際立って美しい。

ヨーロッパ全体のキリスト教王国では、二百以上の大聖堂がブルジョワ階級の台頭とローマ帝国の崩壊で創建された。レオン大聖堂は、十三世紀に建てられた初期クラシックゴシック様式の頂点にあるという。簡素で優美そのものである。それ以前の教会は、ほとんど窓のない石造りの重厚な建築であったが、ゴシック様式では、穹窿天井がもっと軽くなり、窓が広がったのである。

レオン大聖堂の中には、シーンとした宇宙の世界があった。天地創造の瞬間から、人類誕生、旧約聖書の数々の物語、キリストの誕生、処刑、復活、聖母昇天、アポカリプシスなどの新約聖書の世界が無数のステンドグラスに出現されている。どこか遠く遠くの世界の果てからくるような光がそれらのステンドグラスに射すと、今まで潜んでいた色彩が鮮やかにその存在を見せてくれる。赤、紫、水色、黄色、青、緑、白、茶色など文字通り、色とりどりの色彩が光線によって生命を再び与えられるのである。息をのむような華やかな美しさに私たちは圧倒される。十三世紀から十五世紀のゴシック、十七世紀のルネッサンス、十九世紀のネオゴシックなど、数世紀にわたった様々な異なった様式の美の極みに魅せられてただうっとりしてしまう。

刻々と時間が流れるに従い、ファサード、祭壇の後ろ、丸天井、側面の壁などに嵌めこまれた大きさ、高さ、色彩、形状の異なったステンドグラスとバラ窓から射しこむ光が薄暗い大聖堂の中を照らしていく。

まず、東方のキリスト像のある中央祭壇の後ろから、ゆっくりと明けがたのまろやかな光が射しこんで夜の暗闇で真っ暗だった大聖堂の内部をほのかに照らしていく。光の存在、神聖なるものの存在を示してくれる瞬間である。まだ、早朝の無垢な空間には、太古からの静けさが漂っている。

時が過ぎて、南方のバラ窓の聖母昇天が午後の強烈な光線に浮かびあがる。そこには、神の教えを広めるキリストの使徒たち、信仰のために死を選んだ殉

教者たちの姿など、新約聖書の世界が照らしだされる。

西方のバラ窓からは火の玉のような真っ赤な太陽が、沈みきるまでの長い間、最後の審判を人類に突きつける。幼子イエスと共におられるマリア様を取り囲んで十二人の天使たちがトランペットを吹きながら……。

北方の上部のステンドグラスは、光が射さないので暗いが、東側、西側のステンドグラスから入ってくる間接的な微かな明るさに浮かび上がるのは旧約聖書の中で語られている預言者を始めとする人物たちである。キリスト誕生以前の世界は、光のない闇の世界であった。

パラドール・デ・レオンは、マルコス広場にある。広場には巡礼者像がパラドールに向かって設置されている。中世の頃の衣服を身にまとった年輩の男が、両手を前に組んで頭を少し上げ、眼を閉じている。サンダルは、裸足の右脇においてある。長い間の巡礼の旅を終えて、やっとマルコス修道院に着いてほっとして休息をとっている姿が巧みに表現されている。

昼食を摂った後、私も広場のベンチのひとつに座り、同じようなポーズをとって長い間休息をした。昼食時のせいかな、広場にはほとんど人の姿が見えない。巡礼の道を歩くのは、精神的にも身体的にもエネルギーがいる。今回、ふつう五泊六日で歩く距離をほとんど倍の日数をかけゆっくりとまわりの風景を眺めながら歩いた。巡礼の道の途上にある歴史的に重要なモニュメントを訪ね、民間伝承を学び、あらゆる国の巡礼者および、土地の人たちと楽しい会話をしながらひと時、心を通わせてきた。

こうして巡礼の旅が終わった。旅の終わりは、心の分岐点。……さあ、新たな旅へ出発しよう、という、みず色の空にふわふわ浮かんでいる真っ白な雲からの呼びかけに耳をすませた。

参考文献 (BIBLIOGRAFÍA)

Alfa y Omega. Los secretos del éxito de Fátima. Andrés Beltramo Álvarez. Ciudad del Vaticano. Imprime y Distribuye Diario ABC. Etapa II, Número 1.025. Mayo, 2017.

Codex Calixtinus. Especialmente el libro segundo de Santiago, el tercero sobre la traslación de Santiago y el libro quinto de cómo los peregrinos de Santiago hayan de ser recibidos.

(<http://www.caminosantiagoencadiz.org/index/Codexcalixtinus/CodexLibroI I.html>)

Colmena, La. Camilo José Cela. Madrid, Clásicos Castalia, 1990.
Introducción biográfica y crítica de Raquel Asún Escartín.

Crónica de España. Barcelona, Plaza & Janes, 1988.

Guía del Camino de Santiago. Camino Portugués de Antón Pombo.
Madrid, Anaya, 2012.

León. La Nueva Crónica. Un plan integral de atención y seguridad para los peregrinos. Jueves 11.05.17.

Museo León. Live. La historia. Experience history. Incluye 63 placas informativas que ofrecen una visión de la historia del museo. El Convento Hospital de San Marcos nace en el siglo XII a la orilla del Camino Jacobeo.

Mazurca para dos muertos. Camilo José Cela. Seix Barral. Barcelona, 1990.

País, El. Cela, la literatura y los periódicos. Borja Hermoso. Madrid. Jueves 11 de mayo de 2017.

Revista Catedral de León. El sueño eterno. The eternal dream. Año I. N.2 Enero, 2017.

須賀敦子全集（第二巻）。アスフォデロの野をわたって。須賀敦子。

河出書房新社、東京、2006年

長い旅の途上。星野道夫。文春文庫。東京。2002年。

旅をする木。星野道夫。文春文庫。東京。2008年。



「スペインの巡礼の道を歩く」
La autora recorriendo el Camino de Santiago.

2. REFLEXIONES EN EL CAMINO DE LA ORACIÓN.

(El Camino de *Oracio*: オラシヨ巡礼の道)

Por Bernardo Villasanz

Al visitar el camino de peregrinación de la oración (El Camino de *Oracio*: オラシヨ巡礼の道) el peregrino encuentra templos y sendas de otras religiones que pueden ser consideradas como “Semillas del Verdadero Camino”.

Desde el punto de vista cristiano estos caminos son transitados por almas que ignorantes de la religión auténtica realizan en algunas sectas prácticas ascéticas conforme a una rígida moral por un deseo de bondad innato de purificación y tal vez en este sentido con una intención pura. Tratan de vivir y obrar con caridad y justicia, según la ley de la conciencia sirviendo de este modo al Ente cuya existencia sienten.

Almas que están en la oscuridad pero que tienden instintivamente a la Luz, que están en el error de un culto idólatra o separado, pero que tienden instintivamente a la Verdad. Por su propia índole tienden al Bien y recorren sin saberlo el Verdadero Camino.

Estas personas aunque de una fe diferente (y sin ignorancia culpable) pueden estar unidas a Dios sin conocerle. El sacrificio de holocausto que efectúan en sus prácticas pueden estar unidas al Sacrificio de la Cruz en cuyo caso no habrá sido inútil.

En todos los caminos que van a confluir al Verdadero Camino

encontramos una búsqueda de sí mismo, la búsqueda del **verdadero yo**. Una búsqueda que implica darse cuenta uno de las propias debilidades y la necesidad de doblegar por voluntad propia todas las pasiones. Ésta suele ser la primera señal para comenzar este viaje espiritual.

Cada cual decide cuándo comenzar esta peregrinación de acuerdo a su libre voluntad. Se precisa buena voluntad y recta intención. Ser peregrino en la búsqueda de la Verdad quiere decir tomar partido contra el mundo al que hay que presentar batalla.

El siguiente paso suele ser reconocer que el hecho de acumular conocimientos no permite necesariamente experimentar la vida del espíritu.

La **iluminación de la conciencia** percibe dentro de la propia alma una lucha interna en el propio yo. Este conflicto de identidad desgaja al yo en dos partes: una que tiende al mundo real y otra que tiende a lo sobrenatural.

Es una búsqueda dentro de nosotros, en el fondo del alma hasta que se consiga algún destello de luz, una iluminación de la conciencia que ayude a ver más allá de las aparentes contradicciones.

Se trata de un duro trabajo para mortificar lo que somos sacrificándonos como víctimas para llevar a efecto la unidad de la voluntad humana y la divina.

En el cristianismo lo importante es el llegar a experimentarse como una “nada” (anonadamiento) pues cuando el alma más se percibe como una nada, más podrá ser llena de la Gracia del Espíritu Santo.

La purificación completada da lugar a un **nuevo yo** que es cuando entonces el alma ha sabido renacer de nuevo abandonándose en la divinidad. En este estadio el alma no se reconoce a sí misma, se ha despojado de su pasado y se complace en la contemplación de la Mente Suprema (Eucaristía).

Una vez que la persona ha renacido busca las gemas potenciales en cualquiera que podamos encontrar sea del credo que sea. No basta con saber que todos son hermanos sino que se trata de ser y vivirse hermano de todos según los valores universales de la doctrina de Jesús.

Buscamos el bien y la verdad también entre el mal y el error intentando comprender empatizando, en vez de rechazar de plano cualquier otra creencia. En relación con el Misterio hay muchas mediaciones válidas tan importantes como la propia fe.

Esta aproximación nos ayuda a liberarnos de la propia idolatría pues al estudiar la verdad del hecho religioso percibimos la posibilidad de que cualquiera puede tener el paganismo en su corazón sea del credo que sea.

En este camino común que todos hacemos siempre recordamos que no hay ninguno (aunque sea el idólatra más lejano o el ateo más convencido) que esté absolutamente privado de una huella de su origen.

Aquí en este punto el Camino se vuelve tortuoso, pedregoso y cada vez más difícil porque el verdadero camino de la Cruz exige vivirlo a fondo, exprimiendo todo el jugo del momento presente que nunca más volverá a pasar. Discernir la pureza de intención es lo esencial pues aunque vivamos en las mayores de las calamidades el camino de Jesús es una de las mayores alegres aventuras cuando se vive con pureza de intención.

El Camino de la Oración es una tarea ilusionante y apasionante que tiene una proyección social con una gran esperanza en la Segunda Venida del Reino eucarístico de Jesús.

Previo al Reinado eucarístico viene el aparente reinado del Anticristo, una especie de gobierno mundial donde se sincretizarán diversas creencias para lograr dominar las conciencias del mundo.

No obstante esto una nueva humanidad resucitada es posible después de esta Gran Tribulación. Las almas de los peregrinos que siguen el camino de la oración emergerán de la nada y con María al frente derrocarán al Mal. Es el triunfo del Inmaculado Corazón de María.

El mundo por haber olvidado la religión se va destruyendo por esas nuevas ideologías y teorías produciendo “falsos pacíficos” que son los que continuamente hablan de paz pero sus gestos y comportamientos transmiten todo lo contrario. Y esto es porque lo primero para transmitir paz es el ejemplo de la propia vida. Y siempre la verdadera paz viene de la adoración eucarística.

El camino de la oración no rechaza el sufrimiento pues las almas elegidas sufren para la purificación al igual que el oro se purifica en el fuego. No obstante los sufrimientos no son elegidos por propia voluntad sino que las reparaciones las ordena Dios que enseña en los momentos de desolación la intuición y concede la Gracia para alcanzar un alto grado de meditación. La intuición es una gracia espiritual que reanima las facultades.

La verdadera libertad se produce cuando un alma se despegas del mundo y va hacia la Trinidad. Significa desprenderse de las solicitudes del mundo sirviendo a la Voluntad divina y siguiendo esa intuición sobrenatural.

Por usar una analogía el alma es como un espejo que refleja la Luz de la Trinidad. Esto implica sentir el dolor de Dios sintonizando con todos los que sufren y compartiendo sus penas. En sus sufrimientos un alma refleja la imagen de Jesús. Cada alma tiene su propio camino de glorificar y alabar a Dios que da la dosis adecuada según la capacidad de resistencia de cada uno.

Dios no hace distinción entre personas según sea el credo religioso pues todos le pertenecemos, somos uno ante sus ojos. Cualquiera que se de cuenta

de lo indigno que es habrá empezado el camino de la perfección que no es sino el camino divino de la santidad y sus virtudes.

Para permanecer en constante oración es necesario intentar pronunciar siempre palabras santas. Con nuestra actitud, pensamientos, deseos, reflexiones y todo tipo de necesidades se convierten en una oportunidad para animar este don de la oración.

Con la oración se trata de impedir albergar idolatría en el corazón, creer en las verdades iluminadas por el Espíritu Santo que por ser Sabiduría fue el primero en salir de la boca de Dios y que existe en todo lo que existe llevando a todos un reflejo de lo Alto, preparando la búsqueda de la divinidad.

En todas las religiones reveladas hay una corriente de Verdad que el Espíritu Santo riega y fecunda por medio de la Gracia, de los siete dones y de los siete Sacramentos en los católicos fieles.

El Camino de la Oración comienza con la verdadera devoción al Corazón de Jesús a través de María. Esta Verdadera Devoción al Corazón de Jesús es el Amor a la Eucaristía, un don que necesita ser compartido.

Camino estrecho y de senda angosta que aunque se va endureciendo a medida que avanzamos, misteriosamente imprime un ardor propio como de un guerrero que se sabe débil pero que es fortalecido por el Amor.

No es un camino sentimental y de poco valor transitorio sino que es donde el peregrino pone seriamente su voluntad y sus buenas obras. Primero se trata de luchar contra nosotros mismos para así después poder luchar contra los otros. La lucha contra el propio sentimiento humano se hace

esencial para esgrimir las armas que sólo se pueden levantar con una firme decisión. La voluntad perseverante debe prevalecer.

Hay que tener cuidado en este camino de la propia percepción visual pues meras impresiones estereotipadas pueden actuar sobre nuestra imaginación y afectividad bloqueando e impidiendo el avance en el campo espiritual. Cada cual hemos de detectar y luchar contra el propio vicio capital al que hay que eliminar para restablecer la virtud.

Cada vez que avanzamos más en este Camino de Oración se percibe con más nitidez que el que no se abre tarde o temprano a la luz de Cristo nunca verá el camino verdadero a seguir. No es el camino de “nuestra” oración sino el camino de “Su” oración, la del Espíritu Santo operando con gracia santificante en nosotros.

Este camino es auténtico cuando la oración lleva consigo un cambio radical de vida. No se concibe que una persona haga verdadera oración y siga con el mismo estilo de vida de siempre. La transformación es necesaria como fruto.

Por otro lado la acción creadora del Espíritu Santo en lo que se refiere a posibles experiencias místicas no se trata de que sintamos necesariamente cosas extraordinarias, lo que sería una manera clara de fomentar el propio egoísmo o egocentrismo, sino de aceptar el sacramento del momento presente sea gozoso o penoso.

Por eso se dice siempre que la acción del espíritu se reconoce mejor en los pobres y humildes en vez de entre los sabios y altaneros pues este tipo de actitud lo que hace en realidad es embotar la inteligencia y borrar el verdadero camino del Amor.

Se suele entender como éxtasis contemplativo el rayo de Luz Divina que

penetra en el alma y la hace ver y conocer por un momento a Dios tal como es. Una forma de intimidad divina que es obra de la Voluntad de Dios.

Pero éxtasis no significa sólo permanecer fuera de los sentidos por visiones gozosas de contemplación del Paraíso. Puede hablarse de éxtasis más profundo cuando uno se abstrae del dolor moral además del físico pero sin perder los sentidos. En la adoración eucarística, cuando la oración y la palabra de Jesús es lo único que puede calmar nuestro sufrimiento presente es el punto más alto que el ser humano puede alcanzar de unión con Jesús. Y eso ya puede considerarse éxtasis.

Si lo que se pretende es poseer una Fuerza que mueva el mundo hay que contar sin duda con la fuerza espiritual de la Eucaristía. La sencilla adoración eucarística no deja de ser la historia del Amor de Dios con cada alma creada. Almas que se convierten en un poco místicas porque se dan cuenta que es obvio que hay que responder con amor al Amor.

Vamos entendiendo que cuando caminamos a través de dificultades muchas de ellas son permitidas por Dios para pulirnos, para enseñarnos a acercarnos a Él, para aumentar nuestra confianza y dependencia. Esta dependencia nos afianza en la paz y en su providencia al contrario que cuando dependemos del mundo que nuestra vida cambia con cada cambio que sucede en el mundo.

La tristeza y el sufrimiento van dando paso a valorar nuestras vidas como puro Don de Dios, miremos nuestra vida por donde la miremos. Los varapalos no tienen el poder de tumbarnos precisamente por esa confianza cada vez más plena en Jesús a través de la oración.

Solemos echar en cara a Dios todo el mal que nos sucede pero no pensamos en el dolor de Dios y el gran don que recibimos porque somos

llamados a consolar al mismo Dios.

En el cristianismo a diferencia de otras creencias la Divinidad no tolera el vacío porque Dios es “plenitud”. Símbolo de la plenitud es la esfera porque la esfera representa el todo.

En las relaciones humanas en general y en la vida cotidiana en particular hay que saber desapegarse de los lazos afectivos y de los objetos pues cualquiera de nosotros puede sentir el deseo de poseer algo, de hacerlo “para mí”. Podemos apropiarnos tanto de una idea, como de una persona, o bien del éxito, de un gran nombre, de dar una buena imagen de sí e incluso, y esto es lo peor, podemos apropiarnos de nuestro “yo”, de nuestro “ego”, transformándonos en propietarios de nosotros mismos. Un tipo de apropiación psicológica o autoafectiva que nos esclaviza de nosotros mismos.

Y esto es así porque una vez que nos apropiamos de nuestro “yo” presentimos que puede estar amenazado. Este temor toma la forma de ansiedad, agresividad o sobresalto de tal manera que fácilmente saltamos a la defensiva. De aquí las rivalidades, los partidismos, las discordias que nos roban la alegría de vivir porque nos sentimos atrapados por la misma propiedad. Nos hacemos esclavos de nuestra propiedad porque nos buscamos a nosotros mismos y no a Dios y porque la mayor necesidad es creerse tan inteligente que no se necesite aprender nada de la religión e incluso nos atrevemos a juzgar la obra de Dios.

Está claro que el ideal cristiano es la transformación de sí mismo de tal forma que el Yo de Jesús invadirá completamente nuestro “yo”.

Estamos indicando lo que “La nube del no saber” nos señala cuando se refiere a la actitud del hombre humilde que es el que permanece en la verdad con un conocimiento y apreciación de sí mismo tal cual es. Primero

reconocerá en sí mismo la flaqueza y miseria de la condición humana y en segundo lugar la bondad de Dios en su amor hacia el hombre.

Y en esta bondad en el camino de la oración el alma se acoge a la misericordia divina para restituir la Gracia perdida por el pecado original. Encontramos en el camino chispas de luz que como recuerdos impiden la desesperación, el abatimiento y la desesperanza.

Vamos descubriendo que hemos sido creados para la perfección y es éste un deseo que proviene directamente de la divinidad y que ya el Padre había depositado en nuestro espíritu.

No obstante esta bondad de Dios para con todos hay que distinguir los deseos espirituales de las almas que no están regeneradas por el Bautismo (y por tanto privadas de la Gracia) de las que sí lo están.

Las primeras en su caminar tienden instintivamente al Espíritu supremo mientras que las regeneradas por el Bautismo y los Sacramentos son impelidas más bien divinamente y tienden a la contemplación que es ya una unión y fusión de la criatura con el Creador. Máximo exponente de esta divinización es la contemplación y adoración de la Eucaristía.

Se ha asemejado esta unión del alma a una llama de fuego (San Juan de la Cruz) porque el Fuego de la Divinidad la hace arder purificándola y transformándola.

Este camino de la oración es el camino del alma y de la lucha entre sus dos "yoes" : el yo espiritual (yo superior) que se acuerda de su origen divino y el yo humano (yo inferior) que se acuerda de las exigencias de las pasiones.

Aunque el alma nace muerta por el pecado original en su fase de creación tiene como ente espiritual la maravillosa capacidad de renacer por

propia voluntad y puede por así decirlo “resocializarse”, que es en realidad un recrearse por un deseo de nacer de nuevo a la Gracia.



CONCLUSIÓN

El camino de la oración es en suma un continuo estar alerta en el trabajo con serenidad y diligencia para no abandonar la perseverancia. El combate de la oración es una lucha contra nosotros mismos y contra las tentaciones.

En este sentido y para no caer en el egoísmo todo lo orientamos al altruismo, esto es, al bien común. No intentamos justificarnos y reconocemos nuestros errores. La Verdad hasta la muerte para no mentirnos a nosotros mismos.

Aunque no somos nada tratamos de corregir con amor y agradecemos las correcciones de quienes nos advierten sin resentimiento ni odio. No juzgamos para no ser juzgados pues no somos Dios, somos dioses por participación hechos a su imagen.

La vida es como un camino de peregrinación. Aunque a veces es dolorosa se hace alegre con el amor. ¿De dónde provienen las guerras? Del egoísmo, que es falta de amor.

Según la enseñanza paulina tener amor es saber soportar con alegría las contrariedades de la vida, intentando siempre ser amable sin enojarse ni guardar rencor. Es no ser presumido, ni orgulloso ni egoísta.

Ahora vemos de una manera borrosa, como en un espejo, pero un día lo veremos todo tal y como es en realidad. *Por eso no nos desanimamos pues aunque por fuera vamos envejeciendo, por dentro nos rejuvenecemos día a día. Lo que sufrimos en esta vida es cosa ligera, que pronto pasa porque no nos fijamos en lo que se ve, sino en lo que no se ve. Lo que se ve es pasajero pero lo que no se ve es eterno* (2 Cor 4,16).

Así pues el amor es el camino, la verdad y la vida porque el amor es

la gran fuerza del universo que nunca dejará de existir. El Amor divino es como una Luz de fuego ardiente y nuestra alma como una de sus llamas. En el Cantar de los Cantares se dice que *el fuego ardiente del amor es una llama divina* (8,6).

La mejor oración viene a ser aquella que desea se cumpla la gloria de Dios y que sirve para la santificación de todos. Es la oración que olvidándose de sí mismo y de los propios martirios pide por los demás recordando la súplica de Jesús en la Cruz: “Padre, perdónales”.

Seamos dulces en la reacción perdonando la ofensa pero inamovibles y tenaces en nuestra certeza. En el camino de la oración se ha de guardar una especial prudencia cuando los demás rechazan la Palabra sin querer convencerse. Es inútil intercambiar palabras vanas en cosas que son sagradas con personas que se oponen a la doctrina cristiana. Silencio y perseverancia reconociendo que aunque Jesús nos haya tumbado con su Gracia, en nuestro corazón todavía no reina completamente, estando como estamos siempre en proceso de conversión y transformación.

La importancia de la oración, en suma, ha sido claramente explicitada al retirarse Jesús en el monte para la elección de los Apóstoles y antes de enseñarles la oración por excelencia. Podemos leer en la gran obra “El Evangelio como me ha sido revelado”:

(...) Ha llegado el momento de que haga uso de vosotros, pero para ello os debo formar. Recorro a la medicina de la oración, que es el arma por antonomasia. Siempre he orado por vosotros, ahora quiero que seáis vosotros mismos quienes oréis. Todavía

no os enseñó mi oración, pero sí os doy a conocer ya el modo de orar y lo que es la oración: coloquio de hijos con su Padre, de espíritus a Espíritu, abierto, cálido, confidencial, recogido, franco. La oración lo es todo: confesión, conocimiento de nosotros mismos, llanto por nosotros mismos, promesa a nosotros mismos y a Dios, petición a Dios; todo hecho a los pies del Padre. No puede hacerse en medio del bullicio, entre distracciones, a menos que se sea un coloso en la oración (y, aun así, incluso los colosos se resienten de este choque y ruido del mundo en sus horas de oración). Vosotros no sois colosos, sois pigmeos; sois sólo párvulos en el espíritu, parvos del espíritu. Aquí alcanzaréis la edad de la razón espiritual. (...)

(María Valtorta, Volumen Tercero, p.22)

BIBLIOGRAFIA RELACIONADA

AMOR DE DIOS QUE ES AMOR, EL. Lázaro Pulido, Manuel (Ed.)

Cáceres, Servicio de Publicaciones Instituto Teológico “San Pedro Alcántara”, 2007.

CRISTIANISMO EN JAPÓN, EL. Ensayo desde ambas orillas. Servicio de Publicaciones Instituto Teológico “San Pedro Alcántara”, 2011. Barbolla, Domingo, Osami Takizawa, Miguel Ángel Aragón, Mutsuo Yamada. Manuel Lázaro Pulido (Coord.)

CRUZ Y LA CATANA: RELACIONES ENTRE ESPAÑA Y JAPÓN (SIGLOS XVI-XVIII), LA. Tesis doctoral. Universidad de la Rioja. Ainhoa Reyes Manzano. 2013–2014. (web)

CRUZANDO EL UMBRAL DE LA ESPERANZA. Juan Pablo II. Barcelona, Plaza & Janés Editores, S.A., 1994.

EVANGELIO COMO ME HA SIDO REVELADO, EL. Valtorta, Maria. Italia, Centro Editoriale Valtortano, 2002. 10 Tomos. Centro Editoriale Valtortano, 2002. 10 Tomos. De la misma autora:

- ***Cuadernos, 1943.*** Italia, Centro Editoriale Valtortano, 2000.

- ***Cuadernos, 1944.*** Italia, Centro Editoriale Valtortano, 2003.

- ***Cuadernos, 1945–1950.*** Italia, Centro Editoriale Valtortano, 2005.

- ***Lecciones sobre la Epístola a San Pablo (web).***

FRANCISCO JAVIER su vida y su tiempo. Georg Shurhammer. Bilbao, Herder, 1992

GALICIA Y JAPÓN. Del sol naciente al sol poniente. Marcelino Agís Villaverde en “Aspectos filosóficos y antropológicos del Camino de Santiago. Fenomenología de la peregrinación a Compostela”. UDC. 2008. Universidade da Coruña.

HISTORIA DE LAS CREENCIAS Y DE LAS IDEAS RELIGIOSAS. Eliade, Mircea. Barcelona, Herder, 1991.

IDENTIDAD, MEMORIA E HISTORIA. Edición a cargo de Marcelino Agís Villaverde. XII Encuentros Internacionales de Filosofía en el Camino de Santiago. Universidad de Santiago de Compostela, 2013.

PEREGRINO, EL. Autobiografía de San Ignacio de Loyola. Introducción, notas y comentario por Josep María Rambla Blanch. S.I., 1983.

PEREGRINO, EL. Juan Bunyan. (web)

REGRESO DEL HIJO PRÓDIGO. EL. Nouwen, Henri J.M. Madrid, PPC Editorial, 1998.

REINADO EUCARÍSTICO. Dictados de Jesús a Marga (web).

RELIGIÓN Y ESPIRITUALIDAD EN LA SOCIEDAD JAPONESA CONTEMPORÁNEA. Federico Lanzaco Salafranca. Serv. Public. Universidad de Zaragoza, 2008.

SUBIDA DEL MONTE CARMELO, LA. San Juan de la Cruz. Microbookstudio. (web)

SURCO. San Josemaría Escrivá de Balaguer. Madrid, ediciones Rialp, 1986.

TRIUNFO DE LA INMACULADA, EL. Dictados de Jesús a Marga (web).

VERDADERA DEVOCIÓN AL CORAZÓN DE JESÚS. Dictados de Jesús a Marga (web).

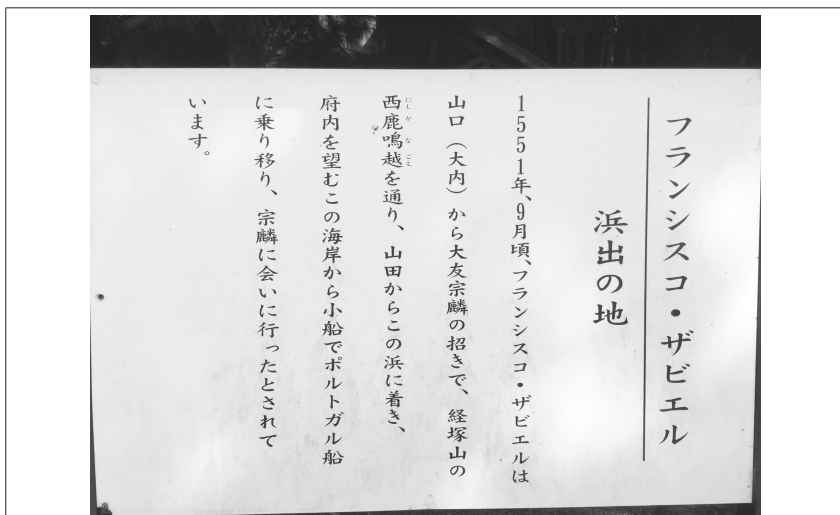
Agradezco a todos los que directa o indirectamente han contribuido a la realización de este ensayo y en cuanto a los errores teológicos o dogmáticos expreso mi adhesión a la doctrina del magisterio de la Iglesia Católica.



El autor en el camino de San Francisco Javier. Kunisaki (Oita, Japón).



Letrero con la inscripción: *camino andado por Javier.*



Letrero: Francisco Javier en Septiembre de 1551 al encuentro de un barco portugués.



Ora et labora (en español: *reza y trabaja*) es una locución latina que expresa la vocación y la vida monástica benedictina de alabanza a Dios junto con el trabajo manual diario. De origen reciente (siglo XIX), la locución no se encuentra propiamente en la Regla de San Benito, sino que encontramos su esencia -aunque con otras palabras- en la Lectio Divina (estudio meditativo de las Sagradas Escrituras). Inore – Hatarake (en japonés).



Al finalizar el recorrido del camino de la oración puede observarse la reliquia de San Francisco Javier en el monasterio Trapense de Oita.

La **Orden Cisterciense de la Estricta Observancia** (**O.C.S.O.** por su nombre oficial, en latín, *Ordo Cisterciensis Strictioris Observantiae*), conocida como **Orden de la Trapa**, es una orden monástica católica, cuyos miembros son popularmente conocidos como **trapenses**. Tienen como regla la de San Benito, la cual aspiran seguir sin lenitivos. Nacen como una ramificación de la Orden del Cister, que a su vez se originó de la Orden de San Benito. (wikipedia).